

関道遺跡

昭和63年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

「関道遺跡」の調査は、宇都宮市立横川西小学校の南側「一里南通り」の道路拡張を契機とするもので、昭和61年6月16日から開始され、昭和61年11月15日まで、約5ヶ月にわたり、行われました。調査期間中、調査地区が、陸上自衛隊北宇都宮駐屯地の飛行場のすぐ北側ということもあり、航空法等の様々な制約を受けることになりましたが、互いの協議により、予定通り、調査を終了することができました。

宇都宮市江曾島町には、雷電山古墳をはじめ、数多くの遺跡が存在しており、今回、調査を実施した「関道遺跡」も、古くから土師器片、須恵器片が拾える場所として知られていました。そして今回の発掘調査によって、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡が、8軒発見されるとともに、多数の良好な土器資料等を得ることができました。この成果は、本報告書に記録いたしましたので御活用いただければ幸いです。

末文になりましたが、調査にあたり御指導いただきました本市文化財保護審議委員会委員の髙静夫・大金宣亮・橋本澄朗の3先生方、また、なにかと便宜をお困りいただきました土地所有者の中山栄吉氏（市内江曾島町1159番地）に対しまして深くお礼申し上げます。

昭和63年3月31日

宇都宮市教育委員会教育長 後 藤 一 雄

例 言

- 1 本書は、宇都宮市江曾島町1159番地外に所在する関道遺跡（宇都宮市登録番号259）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、昭和61年6月16日～11月15日まで実施したものである。
- 3 遺構、遺物の整理、実測等は、金田信夫、梁木誠の協力を得て、赤石澤亮がこれにあたった。また、写真撮影に関しては、遺構写真も赤石澤亮が、遺物写真に関しては、村上敏成、綱川和之両氏の協力を得た。
- 4 本書の執筆・編集は、定岡明義、梁木誠との協議を踏まえ、赤石澤亮がこれにあたった。
- 5 出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査の関係者は次のとおりである。

指導委員 宇都宮市文化財保護審議委員会委員 堀 静夫
同 大金 宣亮
同 橋本 澄朗

事務局 宇都宮市教育委員会社会教育課

課 長 塚田 隆一 (調査員)
文化振興係長 小林 錦一 文化振興係 定岡 明義
文化振興係 渡辺 卓 同 梁木 誠
同 斉藤 全男 同 赤石澤 亮
同 手塚 英男 同 大塚 雅之
同 小松 俊雄 同 神野 安伸

調査補助員 荒井 麻里 遠藤 百代 大野 節子 大森 八重子
塚田 幸子 綱川 時己 中山 包子 北条 雪

学生 呉坪 融 小金井 信治

遺物整理補助員 遠藤 百代 大野 節子 大森 八重子
塚田 幸子 鈴木 芳子

なお、発掘調査および報告書作成に際しては、多くの方から御援助、御教示を賜った。

記して心から感謝の意を表する。

阿久津 勝利氏 石橋 知明氏 岩上 照朗氏 上野 修一氏 川原 由典氏
芹沢 清八氏 高橋 敬三氏 田熊 清彦氏 宮崎 光明氏

目 次

• 発刊にあたって	
• 例 言	
I 調査に至るまでの経過	1
II 位置と環境	
1 遺跡の位置	2
2 周辺の地形	2
3 周辺の遺跡	3
III 調査の経過	5
IV 検出された遺構と遺物	
1号住居跡	10
2号住居跡	11
3号住居跡	14
4号住居跡	21
5号住居跡	24
6号住居跡	32
7号住居跡	42
8号住居跡	48
1号溝	55
2号溝	56
3号溝	57
1号土坑, 2号土坑	58
3号土坑, 4号土坑, 5号土坑	59
6号土坑, 7号土坑	60
1号性格不明遺構	60
表土中よりの出土遺物	61
V まとめ	
1 遺構について	66
2 出土遺物について	67

挿 図 目 次

第1図	関道遺跡位置図	1
第2図	関道遺跡調査地区図(1)	2
第3図	関道遺跡周辺の地形と遺跡分布図	4
第4図	関道遺跡遺構配置図(1)	8
第5図	関道遺跡遺構配置図(2)	8
第6図	関道遺跡遺構配置図(3)	9
第7図	関道遺跡遺構配置図(4)	9
第8図	関道遺跡調査地区図(2)	9
第9図	1号住居跡実測図	10
第10図	1号住居跡カマド実測図	11
第11図	2号住居跡実測図	12
第12図	2号住居跡カマド実測図	13
第13図	2号住居跡出土土器実測図	13
第14図	3号住居跡カマド実測図	14
第15図	3号住居跡実測図	15-16
第16図	3号住居跡出土土器実測図(1)	18
第17図	3号住居跡出土土器実測図(2)	19
第18図	4号住居跡実測図	21
第19図	4号住居跡カマド実測図(1)	22
第20図	4号住居跡カマド実測図(2)	23
第21図	4号住居跡出土土器実測図	23
第22図	5号住居跡実測図	25-26
第23図	5号住居跡カマド実測図	27
第24図	5号住居跡出土土器実測図(1)	28
第25図	5号住居跡出土土器実測図(2)	29
第26図	5号住居跡出土土器実測図(3)	30
第27図	6号住居跡実測図	33-34
第28図	6号住居跡カマド実測図(1)	35
第29図	6号住居跡カマド実測図(2)	36
第30図	6号住居跡出土土器実測図(1)	37
第31図	6号住居跡出土土器実測図(2)	38
第32図	6号住居跡出土遺物実測図(3)	39
第33図	7号住居跡実測図	43-44
第34図	7号住居跡カマド実測図	45
第35図	7号住居跡出土土器実測図	46
第36図	8号住居跡実測図	49
第37図	8号住居跡カマド実測図	50
第38図	8号住居跡出土土器実測図(1)	51
第39図	8号住居跡出土土器実測図(2)	52
第40図	8号住居跡出土土器実測図(3)	53
第41図	1号溝実測図	55
第42図	2号溝実測図	56
第43図	3号溝実測図	57
第44図	1号・2号土坑実測図	58
第45図	3号土坑実測図	59
第46図	4号土坑実測図	59
第47図	5号土坑実測図	59
第48図	6号土坑実測図	60
第49図	7号土坑実測図	60
第50図	1号性格不明遺構実測図	61
第51図	表土中よりの出土遺物実測図(1)	62
第52図	表土中よりの出土遺物実測図(2)	63

表 目 次

第1表	開道遺跡周辺の遺跡一覧	5	第14表	7号住居跡土器破片資料	47
第2表	1号住居跡土器破片資料	11	第15表	8号住居跡出土土器観察表(1)	53
第3表	2号住居跡土器破片資料	13	第16表	8号住居跡出土土器観察表(2)	54
第4表	3号住居跡出土土器観察表	17	第17表	8号住居跡土器破片資料	54
第5表	3号住居跡土器破片資料	20	第18表	1号溝土器破片資料	55
第6表	4号住居跡出土土器観察表	24	第19表	2号溝土器破片資料	56
第7表	4号住居跡土器破片資料	24	第20表	3号溝土器破片資料	58
第8表	5号住居跡出土土器観察表	31	第21表	表土中よりの出土遺物観察表(1)	63
第9表	5号住居跡土器破片資料	32	第22表	表土中よりの出土遺物観察表(2)	64
第10表	6号住居跡出土土器観察表(1)	40	第23表	表土中よりの出土遺物破片資料 集計表	65
第11表	6号住居跡出土遺物観察表(2)	41	第24表	栃木県における円形周溝遺構を 有する遺跡例	67
第12表	6号住居跡土器破片資料	42			
第13表	7号住居跡出土土器観察表	47			

図 版 目 次

PL. 1	①調査前の風景	②表土除去作業風景
PL. 2	①遺構検出状況	②遺構検出状況
PL. 3	①1号住居跡	②1号・2号住居跡
PL. 4	①3号住居跡遺物出土状況	③3号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
PL. 5	①3号住居跡と擾乱状況	④4号住居跡
PL. 6	①5号住居跡遺物出土状況	⑤5号住居跡カマド
PL. 7	①5号住居跡	⑥6号住居跡遺物出土状況
PL. 8	①6号住居跡カマド	⑥6号住居跡
PL. 9	①7号住居跡	⑦7号・8号住居跡
PL. 10	①8号住居跡カマド	⑧8号住居跡
PL. 11	①遺構全景	②遺構全景
PL. 12	①遺跡の調査状況	②遺跡の現況
	③発掘調査関係者	
PL. 13	3号住居跡出土土器(1)	
PL. 14	3号住居跡出土土器(2)	5号住居跡出土土器(1)
PL. 15	5号住居跡出土土器(2)	

PL. 16	5号住居跡出土土器(3)	
PL. 17	5号住居跡出土土器(4)	6号住居跡出土土器(1)
PL. 18	6号住居跡出土土器(2)	
PL. 19	6号住居跡出土土器(3)	
PL. 20	6号住居跡出土遺物(4)	
PL. 21	7号住居跡出土土器	
PL. 22	8号住居跡出土土器(1)	
PL. 23	8号住居跡出土土器(2)	
PL. 24	表土中よりの出土遺物	
PL. 25	3号住居跡出土の主な土器	5号住居跡出土の主な土器
PL. 26	6号住居跡出土の主な土器	8号住居跡出土の主な土器
PL. 27	関道遺跡出土の主な遺物	

凡 例

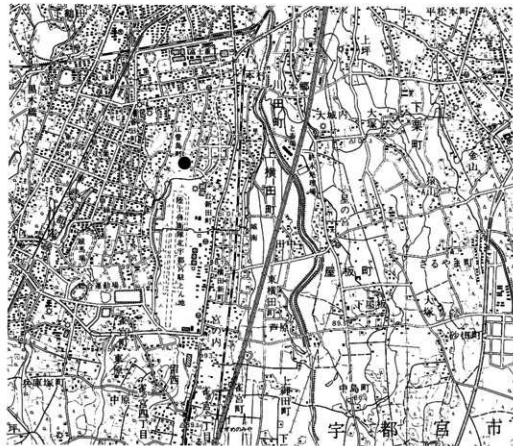
- 1 本文に使用した実測図は、原則として住居跡はしり、土器は、写に縮尺を統一した。
- 2 土器実測図は、土師器断面を白ぬき、須恵器断面を黒ぬりとした。
- 3 土器観察表の法量は、上から口径、器高、底径とし、法量値は、単位がcmで、不明を－、推定を()付きで示した。
- 4 実測図中の標高の単位は、総て m である。
- 5 住居跡実測図中および写真図版中の土器番号は、土器実測図中の番号に一致させた。

I 調査に至るまでの経過

本遺跡は、昭和53～57年の5か年にわたり実施した宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査によって所在が明らかにされた遺跡であるが、一部に、この遺跡の存在は、かなり古く知られており、同土地所有者の中山氏によれば、昭和47年頃、耕作の為に天地換えしを行った際に、土師器の破、甕等が出土したといわれる。それらの遺物は、宇都宮大学に保管されており、昭和54年発行の「宇都宮市史」に開道遺跡出土の土器として、資料が紹介されている。註1

昭和59年12月、当市道路維持課より、都市計画道路「5・5・103、一里南通り」の道路を拡張したい旨の申し出があった。当市教育委員会では、文化財保護の立場から数回にわたり、関係各課と協議を重ねたが、遺跡地の現状を変更せざるを得ず、該当する地域を記録保存するやむなきに至った。そして昭和60年11月、試掘調査を行い、遺跡の範囲及び遺構の分布状態等を確認した上で翌昭和61年当該地域の本調査を実施することとし、その時期を6月から11月までの5か月とした。

註1 宇都宮市史 第1巻、原始、古代編、開道遺跡



第1図 開道遺跡位置図 (1:50,000)

Ⅱ 位置と環境

1 遺跡の位置

本遺跡の所在するのは、宇都宮市江曾島町1159番地他である。宇都宮市の中心部から南へ約4kmのところに位置し、道路を隔てて南側には、陸上自衛隊北宇都宮駐屯地の飛行場がある。この遺跡は丁度、飛行場の滑走路面のすぐ北側部分に位置する為、付近は、航空法に定められた範囲内の建物等の建築しか認められず、飛行場が建設された時の既存の建物がある他は、ほとんどが水田、畑地となっている。

2 周辺の地形

本遺跡が立地するのは、南流する田川の右岸で、南北に延びる低台地の南端部である。遺跡周辺の標高は、105m前後であり南西に広がる水田面からの比高差は、5～6mである。今回の調査地区は、この低台地を東西に横切るように走る道路の拡張部分とその延長部分であり、畑地として開墾された際、又、下水道工事等により、かなり削平を受けている。全体的に、ローム地山までの表土の厚さは、30～40cmと薄く、道路部分に近づくにつれ砂利や小石等が多く混入してくる。



第2図 関連遺跡調査地区図(1) (1:7500)

3. 周辺の遺跡

本遺跡は、南流する田川の右岸の南北に延びる低台地上に立地しており、関連遺跡についても、大部分が同様な立地の様相を呈している(第3図)。時代としては、縄文から中世と各時期にわたり、内容も集落、古墳、城館と多種多様である。ここでは、本遺跡との関連から古墳時代に属する遺跡及び内容が比較的明らかにされている遺跡を中心に紹介していくこととした。

塚山古墳群(196) 田川の右岸、舌状に延びた台地の南端に立地し、現在、西南する前方後円墳である塚山古墳(全長約95m)、その西南に、軌立貝式前方後円墳である塚山西古墳(全長約63m)、その南に隣接して前者と同形式の塚山南古墳(全長約60m)の3基が存在する。特に塚山西古墳の周囲の確認調査の際に、円筒埴輪片、土師器壺、高坏などが出土している。

二軒屋遺跡(205) 雀宮町中原にある弥生時代後期の遺跡で、二軒屋式土器の標式となつたところである。二軒屋式土器の特徴は、深鉢形、壺形を呈し、文様は斜縄文・羽状縄文が発達し、ほかに櫛描文や薫状文がみられる。底部には、木炭痕・布目痕・網代痕などがみられる。現在、二軒屋遺跡の周辺は宅地化が進み、遺跡の位置を確認することが困難になりつつある。

本村上野遺跡(253) 田川の右岸台地上に立地し、表土上には、縄文、土師、須恵器の破片などが散布している。土器の散布地内に2基の円墳が存在しており、それらは、2基とも径20m前後、高さ約2～3mの円墳である。1基の墳頂には墓地在り、他の1基には神社が建立されている。

雷電山遺跡(256) 宮の原から江曾島に延びる低台地上の南端に立地し、南東に広がる水田面から3～4m程の比高差をもつ表土上には、古墳時代中期～後期にかけての土師器片が多数散布している。未確認ながらこの遺跡全体が巨大な前方後円墳である可能性も考えられており、中世には、ここに江曾島城が築城されている。地主安野又兵衛によれば、当遺跡から多量の滑石製模造品が大正10年頃に出土したということであり、その一部は現在、東京国立博物館及び天理参考館に収蔵されている。出土した滑石製模造品は、短甲、斧、鎌、刀子、鏡、有孔円板、剣などがある。

並松遺跡(257) 本遺跡とはほぼ同じ低台地上に立地し、南に広がる水田面とは、約2mの比高差を有する。表土上には、土師器、須恵器などの破片が散在している。

おしめ尽遺跡(260) 本遺跡と同様に、田川の右岸、低台地上に立地する。東側に広がる水田面からの比高差は約3mであり、現況は畑地で土師器や須恵器の破片が散布している。

大山祇神社古墳(261) 田川の右岸段丘東端に立地し、水田面からの比高差は約5～6mを計る。現況は、大山祇神社の境内となっており墳頂には祠が鎮座する。墳形は円墳であり、径約30m、高さ約4mである。

参考文献

『宇都宮市史』原始・古代編 宇都宮市史編さん室 昭和53年

『宇都宮の遺跡』宇都宮市教育委員会 昭和58年



第3図 国道遺跡(259)周辺の地形と遺跡分布図

※網部が遺跡の範囲で、黒ぬり部が調査地区

番号	遺跡名	種別	時期	備考	
179	不動前3丁目遺跡	集落跡	奈良・平安		
180	不動前5丁目遺跡	〃	奈良・平安		
181	關南1丁目遺跡	〃	奈良～鎌倉		
182	ガンセンター東遺跡	〃	奈良・平安時代		
196	塚山古墳群	古墳	古墳		前方後円墳3基。墓の線刻縮輪
197	旭ヶ丘団地北遺跡	集落跡	縄文		
202	關南市場南遺跡	〃	古墳・奈良		
203	若松原遺跡	〃	縄文～古墳		
204	一向寺別院付近遺跡	〃	縄文～古墳		
205	二軒屋遺跡	〃	弥生・古墳		二軒屋式土器の様式遺跡
253	本村上野遺跡	集落跡・古墳	弥生・古墳		円墳2基
255	西原壇遺跡	集落跡	縄文・古墳～平安		
256	雷電山遺跡	古墳・集落跡・城跡跡	古墳・戦国	大型前方後円墳の可能性、江曾島城	
257	並松遺跡	集落跡	古墳～平安		
258	江曾島北原遺跡	〃	古墳～平安		
259	園道遺跡	〃	古墳～奈良	昭和60年試掘調査	
260	おしめ尾遺跡	〃	古墳～平安		
261	大山祇神社古墳	古墳	古墳		
262	大塙林遺跡	集落跡	古墳～平安		

第1表 園道遺跡周辺の遺跡一覧 ※番号は宇都宮市遺跡台帳による。

Ⅲ 調査の経過

・6月16日

基準杭とグリッドの設定を行う。計画道路の中心線に合わせる形でグリッドを組み、表土の除去を開始する。

・6月19日～7月7日

表土除去作業を行う。この期間で東地区の表土除去をほぼ完了し、遺構が調査地区のほぼ全域に及んでいることを確認した。

—発掘日誌抄—



表土の除去作業風景

• 7月8日～7月24日

各グリッドに残したベルトを除去し、遺構のプランを確認する。これによって東地区には、竪穴住居跡6軒と土坑5基、溝状遺構2条等が存在することを確認した。また、各遺構について東側から番号(1～6号住居跡等)を付した。

• 7月25日～7月28日

5号住居跡の北辺が発掘予定地外にかかっていて、土地所有者の承諾を得た上で範囲を広げ全体を確認した。また遺構の存在しない地点にトレンチを設定し基本層位を確認した。



遺構確認作業風景

• 7月29日～8月21日

東地区の各遺構の調査を開始する。1、2号住居跡に関しては、1号住居跡が2号住居跡の中に含まれる形で検出され、3、4号住居跡に関しては、後世の耕作等によってひどく攪乱されていることが判明した。



遺構の調査風景

• 8月22日～9月11日

うね状遺構及び溝状遺構の調査を行う。道路に面した部分については、小石や砂利が敷き詰められており調査が難航した。

• 9月12日～9月20日

5、6号住居跡の調査を行う。これらについては比較的残りも良く、良好な土器の出土状況を見ることができた。特に6号住居跡に関しては、長軸7.28m、短軸7.12mのほぼ正方形を呈し、カマドも北西壁、北東壁の二箇所に構築された跡が認められた。北東壁のカマドの焚口部分は、凝灰岩の切り石を組んでつくられており、他の住居跡の形態と様相を異にしている。



6号住居跡の調査風景

• 9月22日

現場にて、宇都宮市文化財保護審議会委員より発掘調査技術等に関する指導を受ける。

• 9月24日～9月27日

東側地区の実測及び完掘の写真撮影を行う。

・9月9日～10月6日

西地区の表土除去作業及び遺構のプラン確認作業を行う。西地区には、竪穴住居跡2軒と溝状遺構1条等が存在することを確認し、東側より番号(7, 8号住居跡等)を付した。また調査地区の中央部分は、下水道工事等により攪乱されていることが判明した。

・10月7日～10月25日

切り合う形で検出された7, 8号住居跡の調査を行う。7号住居跡のカマド部分が8号住居跡の西壁を切っており、8号住居跡の東壁部分は市道の下に入るという状況であることが確認された。

・10月27日～11月4日

7号住居跡西側に確認された溝状遺構の調査を行う。前述したように、調査地区の中央部分は攪乱されており、攪乱を免れた北側部分を調査した。そのうち西端の溝状遺構については調査地区を北から南へ逆L字状を呈しながら横断することが判明した。

・11月5日～11月10日

8号住居跡のカマド部分の調査及び道路下の東壁部分の調査を行う。8号住居跡のカマド部分については、カマド焚口部の補強として土師器の薬が使用されており、比較的良好な土器資料を得ることができた。

・11月11日～11月13日

西地区の精査を行い、完壁写真撮影及び遺構の測量を行う。

・11月14日

土地所有者立ち合いのもとで埋め戻し作業を実施する。

・11月15日

調査作業所(プレハブ)の撤去を行い、調査終了とする。



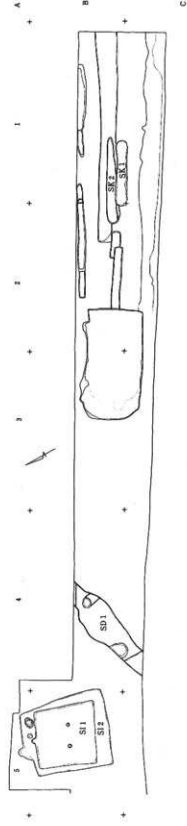
西地区の遺構確認作業風景



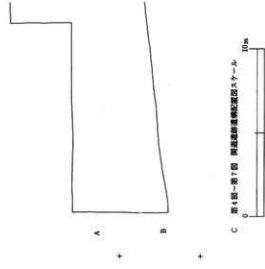
西地区の遺構調査風景



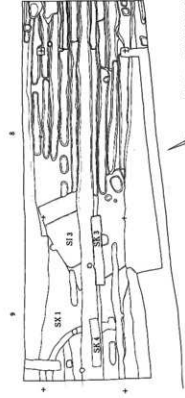
道路下の8号住居跡調査風景



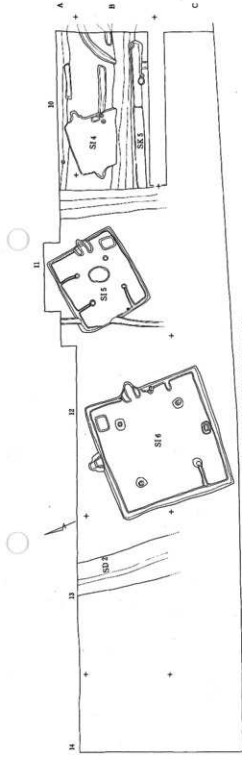
第4図 阿波瀬跡遺構配置図(1)



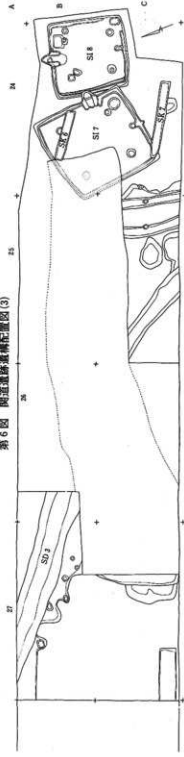
第5図 阿波瀬跡遺構断面図(1)



第5図 阿波瀬跡遺構配置図(2)



第6图 阿拉善旗南院遗址(3)



第7图 阿拉善旗南院遗址(4)



第8图 阿拉善旗南院地区图(2)

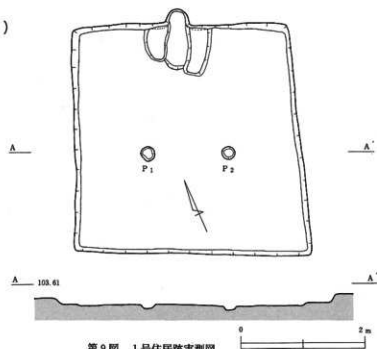
Ⅳ 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡 8 軒と土坑・溝等である。ここでは、これらの遺構の特徴およびそれぞれの出土遺物（土器、鉄器等）の内容について報告するものとした。

1号住居跡（S11）

(1) 遺構について (第9・10図)

本住居跡は、2号住居跡内にすっぽり入る形で検出された。本住居跡のカマド部分が2号住居跡のカマドの南側約90cmのところに構築されているのが確認面から把握できた為2号住居跡が埋没した後本住居跡はつくられたと判断することができる。



第9図 1号住居跡実測図

平面形は、南北長3.7m、東西長3.6mのほぼ正方形を呈する。この地区は、長年の耕作および天地換えし等により表土はかなり削平を受けており攪乱はルーム面にまで及んでいる。その為、壁は確認面からの深さが平均して1.6cmと浅く、残存状況も良好ではなかった。しかし、東壁および南壁に関しては、2号住居跡よりも床面が若干深く掘られていたことから比較的しっかりとした立ち上がりを確認することができた。床面は、全体的に凹凸のない平坦な面となっている。周溝は確認できなかった。柱穴は2本(P1・P2)でやや南寄りの位置で確認でき、これらは同一直線上に掘り込まれている。深さは、P1が10cm、P2が8cmと極めて浅く、中心間の距離(P1-P2)は1.08mである。

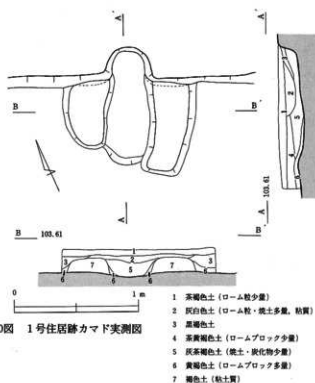
カマドは、北壁のほぼ中央で検出された。壁を楕円形に掘り込み構築されているが、袖部等の残存は良くなく構築材の粘土を検出したにすぎない。煙道は約50度ほどの傾斜をもって立ちあがっており、焼土も燃焼部から煙道にかけて少量検出できただけであった。

(2) 遺物について

本住居跡から検出された遺物は、土師器片のみであり図示可能な遺物は認められなかった。

以下、図上復元のできなかった遺物については、次の土師破片資料集計表で取り扱うこととする。(第2表)

この中で、覆土2層より出土した杯片には、内面黒色を呈した縁部がやや内湾するもの含まれていた。



第10図 1号住居跡カマド実測図

第2表 1号住居跡土師破片資料

種別	土 師 器								合計
	壺			杯					
器種	壺			杯					合計
部位	口縁部	口縁～体部	体部	口縁部	口縁～体部	体部	体～底部	底部	
出土地点									
覆土上層	1	1	24	3	1	6	3		39
覆土中層	3	6	51	2	1	4	1	2	70
合計	4	7	75	5	2	10	4	2	109

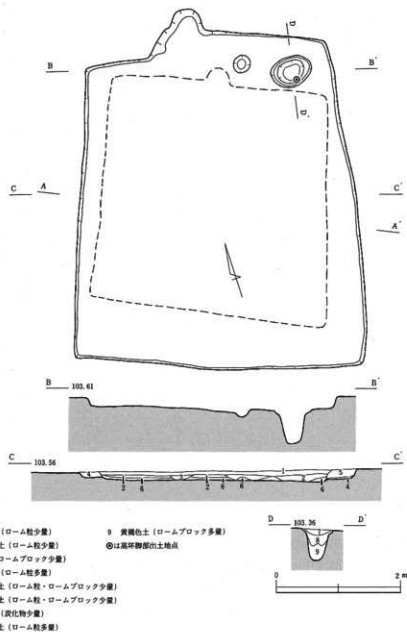
2号住居跡 (S1 2)

(1) 遺構について (第11・12図)

本住居跡は、1号住居跡の中に含む形で検出され、1号住居跡に比べるとやや北寄りに向きをとっていることが確認面から把握できる。規模は南北長5.4m、東西長4.4mで平面形は長方形を呈する。1号住居跡で述べたように、この地区は攪乱がひどく遺存状態が良くない。その為、北東壁については残存壁高18cmを測るが南東、南西壁に関しては明瞭な立ち上がり等を把握することができなかった。中央部の床面は1号住居跡に攪乱されており、各隅のわずかな床面のみが遺存する。

この部分は平坦である。周溝および柱穴は検出できなかった。貯蔵穴はカマドの右脇、北東コーナー寄りから検出されている。平面形は長軸74cm、短軸48cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。

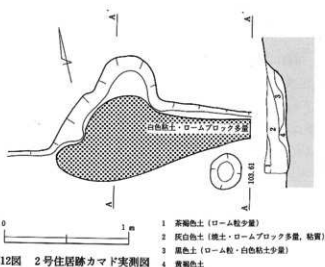
カマドは北壁のやや西寄りから検出されている。カマドについても遺存状態が悪く、確認の段階ですでに構築材と思われる粘土が広い範囲で認められた。



第11図 2号住居跡実測図

カマドは壁を半円状に約52cm前後切り込み、煙道部を作り出しており、なだらかに傾斜をもって立ち上がらせている。また袖部に関しては、残り具合が悪く、規模等を把握することができなかった。

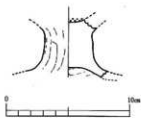
右袖部と思われる位置に隣接して円形のピットが検出されている。大きさは、28cm×26cmで深さは約12cmである。



第12図 2号住居跡カマド実測図

(2) 遺物について

本住居跡から検出された遺物は、土器であり図示し得たのは、1の高杯の脚部1点である。これは、貯蔵穴の覆土上層より出土したものであり残存高は4.5cmを測る。裾部は大きく開くものと思われ、杯部の内面はヘラ磨き後黒色処理が施されている。また脚部の外面は縦位のヘラ削り調整、内面はヘラナデされている。胎土は緻密であり0.1mm程の白色粒子を多量に混入している。焼成は良好であり褐色を呈する。この他、同じ貯蔵穴の覆土上層より土器の坏片が出土している。これは外面に稜を有して口縁部が外反するもので外面ヘラ削り、内面ヘラ磨きで仕上げている。薄手で胎土も緻密で焼成良く、淡い褐色を呈している。



第13図 2号住居跡出土土器実測図

第3表 2号住居跡土器破片資料

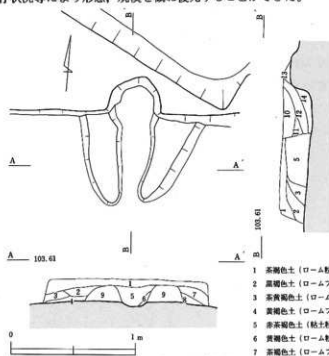
種別	土器								須恵器	合計		
	甕					杯						
	口縁部	口縁-体部	体部	体-底席	底席	口縁部	口縁-体部	体部			体部	
出土地点・層位	覆土上層	2	2	4		1	1				10	
	覆土中層			4	19	1		2		3	1	30
	カマド(覆土2層)	2	3	12	3		1	1	2		24	
	貯蔵穴(覆土1層)			1	2				2		5	
合計	4	10	37	4	1	4	3	5	1	69		

3号住居跡 (S I 3)

(1) 遺構について (第14・15図)

本住居跡は2号住居跡の西約20mから検出されたものである。規模は、南北長5.6m、東西長5.7mで、平面形はほぼ正方形を呈する。この地区についても擾乱がひどく全体的に遺存状態は良くない。壁は北壁、東壁とも確認面からの深さが7cm、8cmと浅く、南壁、西壁については、わずかに掘り込みが認められた程度であった。床面はカマド前部3m程が一段低くつくられており、この部分については固く踏み固められている。他については北東コーナー部分が平坦な面となっているのみで、それ以外は確認できない。柱穴は2本認められた。それらはほぼ対角線上に配されており (P₁、P₂)、深さはP₁が15cm、P₂が14cmである。他に10cm程の浅いピットが1個P₂の南西に検出された。貯蔵穴は、住居跡の南東コーナー寄りから検出されている。平面形は長軸1m、短軸66cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。周溝は認められなかった。本住居跡は、中心部を溝や土坑によって壊され、南壁部分も後世の耕作等により壊されているが、溝中の柱穴および貯蔵穴の検出、三コーナー部分の遺存状況等により形態、規模を概ね復元することができた。

カマドは北壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への掘り込みは、平面形が半円状を呈し、壁からの長さが64cm、幅75cmを測る。また、立ち上がりの角度は約50度であった。袖部は褐色粘土により構築されており、燃焼部も若干掘り凹められて中からは焼土を多量に検出することができた。



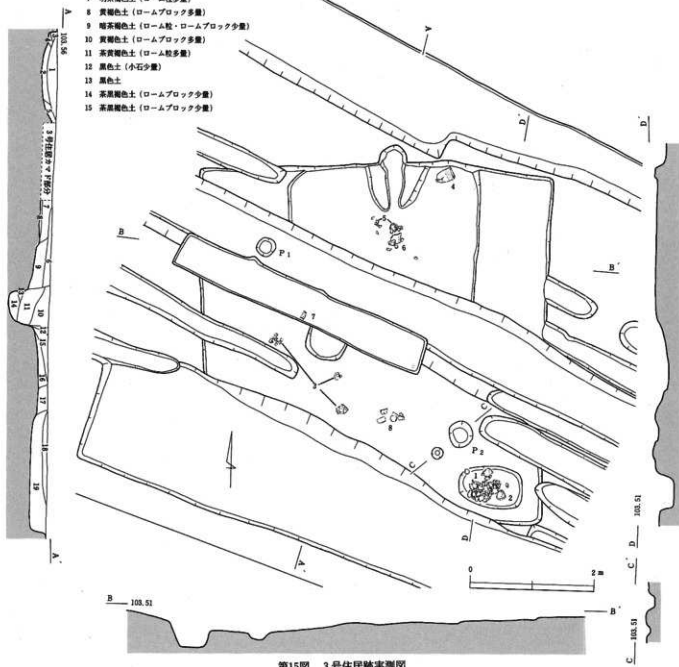
第14図 3号住居跡カマド実測図

(2) 遺物について

本住居跡から検出された遺物は、土器 (第16・17図) である。検出されたものはすべて土師器であり、そのうち図示し得たのは、甕4点 (1, 5, 7, 8)、鉢1点 (3)、甌3点 (2, 4, 6) の計8点である。

- 1 赤褐色土 (ローム粒・炭化物少量)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック多量、粘土粒少量)
- 3 赤褐色土 (ロームブロック・焼土少量)
- 4 黒褐色土 (ロームブロック多量)
- 5 赤褐色土 (粘土粒・焼土多量)
- 6 赤褐色土 (ローム粒少量)
- 7 赤褐色土 (ロームブロック少量)
- 8 赤褐色土 (ロームブロック・粘土粒少量)
- 9 赤褐色土 (ローム粒・粘土粒多量)
- 10 赤褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量)
- 11 赤褐色土 (ローム粒・粘土粒少量)
- 12 黒色土 (炭化物・粘土粒少量)
- 13 赤褐色土 (ローム粒・焼土多量)
- 14 黒褐色土 (ローム粒多量、炭化物少量)

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1 赤褐色土 (ローム粒少量) | 16 赤褐色土 (ロームブロック少量) |
| 2 黄褐色土 (ローム粒多量) | 17 赤褐色土 (ローム粒少量) |
| 3 明茶褐色土 (ローム粒少量) | 18 黄褐色土 (ロームブロック少量) |
| 4 明黄褐色土 (ロームブロック多量) | 19 赤褐色土 (ローム粒多量, 固い) |
| 5 黄褐色土 (ローム粒・粒土粒少量) | |
| 6 赤褐色土 (腐植物・ロームブロック少量) | |
| 7 明茶褐色土 (ローム粒多量) | |
| 8 黄褐色土 (ロームブロック多量) | |
| 9 暗赤褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量) | |
| 10 黄褐色土 (ロームブロック多量) | |
| 11 赤褐色土 (ローム粒多量) | |
| 12 黒色土 (小石少量) | |
| 13 黒色土 | |
| 14 赤褐色土 (ロームブロック少量) | |
| 15 赤褐色土 (ロームブロック少量) | |



第15図 3号住居跡実測図

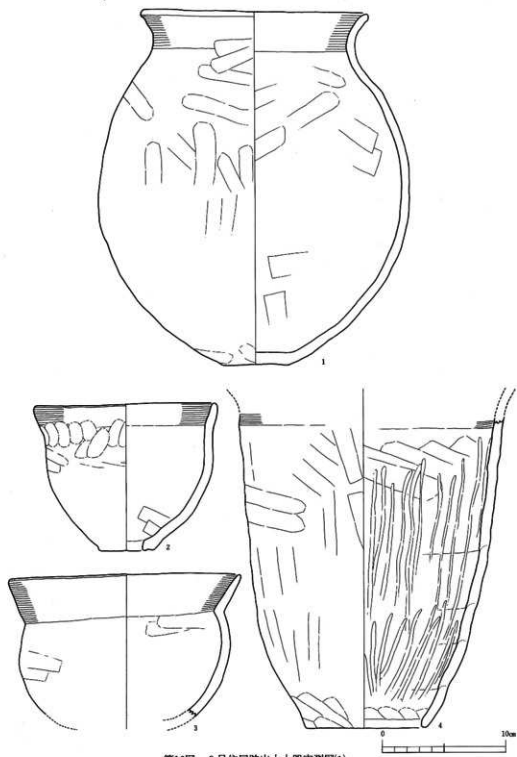
1と2は、いずれも貯蔵穴の覆土上層より出土したものであり、1の甕は割れた状態、2の甕は底部を上に向けた状態で検出された。3の鉢は床面直上よりやや散乱した状態で検出された。4の甕はカマドの東側やや壁寄りから横転した状態で検出された。5の甕と6の甕はカマドの南側、床面直上より近接して検出された。7の甕は本住居跡の中央部分の土坑内覆土上層より出土したもので、覆土層位等から本土坑が埋め戻された際に混入したものと思われる。8の甕はP₂の西側、床面直上より検出されたものである。これらの出土遺物は、7を除いて、いずれも攪乱を免れた地点から検出されている。

なお、このほか、破片であるが、土師器の破片がカマド付近から検出された。

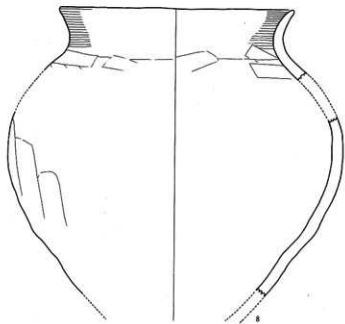
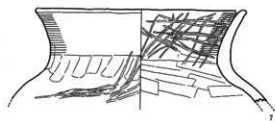
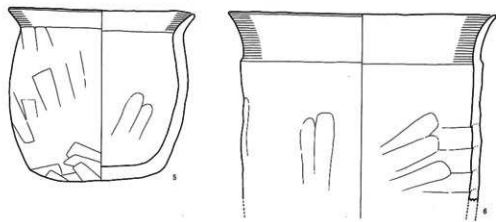
各出土土器の特徴は、第4表に、また、土器破片資料は、第5表に示したとおりである。

番号	器種 (形状)	口径 高さ 底径 (cm)	器形の特徴	調査の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師器 甕	18.4	口縁部は外反。胴部は膨らみ。中位に最大径(25.0)	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土はやや硬。焼成良好。色調は口縁部内面の褐色を除いて黄褐色を呈する。貯蔵穴覆土上層出土。内外面ともよく磨がましい。
		28.3		胴部はヘラナデ	胴部はヘラナデ	
		5.4				
2	土師器 甕 (3形)	15.7	口縁部はやや外反。小形で単孔式	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土は密。焼成良好。色調は一均褐色を呈する他は褐色。貯蔵穴覆土上層出土。
		11.7		口縁部は横ナデ	口縁部のつねね部分に凹線痕	
3	土師器 鉢 (12.5) (5)	18.6	口縁部は、くの字状に外反。小形で胴部は球形	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土は密。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。貯蔵穴西側床面出土。内面のはく磨がましい。
		(12.5)		胴部はヘラナデか		
4	土師器 甕 (5)	—	口縁部は欠損。大形で単孔式	胴部はへう割り後へう磨き	胴部はへう割り	胎土は粗・砂粒多し。焼成はやや良。色調は内面及び外面の一部が黄褐色を呈する他は褐色。カマド東側床面出土。
		8.8		底面はへう割り		
5	土師器 甕 (5)	15.0	口縁部は短く、くの字状に外反。胴部はやや膨らみ。中位に最大径(14.4)小形	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土は密。0.5mmの黒色粒子を多数に含む。焼成は良好。色調は黄褐色を呈する。カマド南側床面出土。
		13.6		胴部はヘラナデ	胴部・底面はへう割り	
		10.2				
6	土師器 甕 (5)	(21.6)	胴部下半欠損。口縁部は外側に壁をもつて鋭く外反	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土は密。0.5mmの白色粒子を少量混入。焼成は良好。色調は黄褐色を呈する。カマド南側床面出土。
		(5)		胴部はヘラナデ	胴部はヘラナデ	
7	土師器 甕 (5)	(17.0)	口縁部から胴部にかけて欠損。口縁部はやや外反	口縁部は横ナデ後へう磨き	口縁部は横ナデ	胎土は密。1mm程度の砂粒を少量混入。焼成は良好。色調は褐色。3号住居跡内土坑覆土上層出土。
		(5)		胴部はへう割り	胴部はへう割り	
8	土師器 甕 (5)	(18.8)	底面は欠損。胴部中位に最大径(27.0)	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ	胎土は密。0.5mmの黒色粒子を多数混入。焼成は良好。色調は胴部下半の黄褐色を除いて褐色。貯蔵穴西側床面出土。
		(5)		胴部はヘラナデ	胴部はへう割り	

第4表 3号住居跡出土土器観察表



第16图 3号住居跡出土土器(美濃国)



第17图 3号住居跡出土土器実測图(2)



種 別	土 部 類											その他	合計	
	部 位	壁				環				蓋	その他			機け石
		口縁部	口縁-体部	体部	体-底面	底面	口縁部	口縁-体部	体部					
出土 地点・ 層位	カマド (瓦土)	14	2	62	2	1	8	1	3	1	3	1		98
	カマド輪 (瓦土)	2		1			1							4
	床 面 瓦 上												2	2
合 計	16	2	63	2	1	9	1	3	1	3	1	2	104	

第5表 3号住居跡土器破片資料

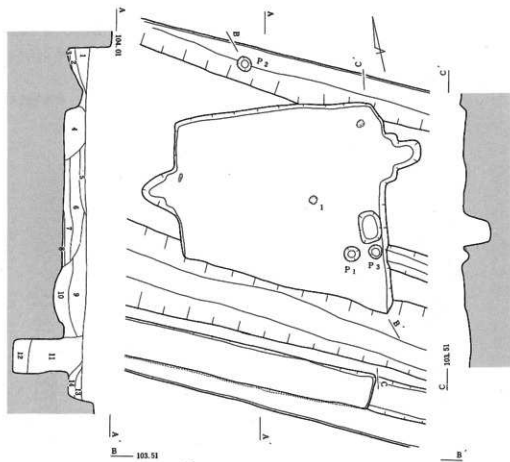


発掘調査指導の様子

4号住居跡 (S14)

(1) 遺構について (第18・19・20図)

本住居跡は、3号住居跡の北西約10mから検出されたものである。この地区までが天地換えしや耕作が行われていた為、1-3号住居跡と同様、遺存状態は良くない。しかし、本住居跡については比較的深く掘り込んでつくられており、規模、形状等を概ね把握することができた。平面形はほぼ正方形を呈し、南北長3.3m、東西長3.4mを測る。壁は、南壁を除けば、確認面からの深さは30cm前後で、立ち上がりは約70度である。



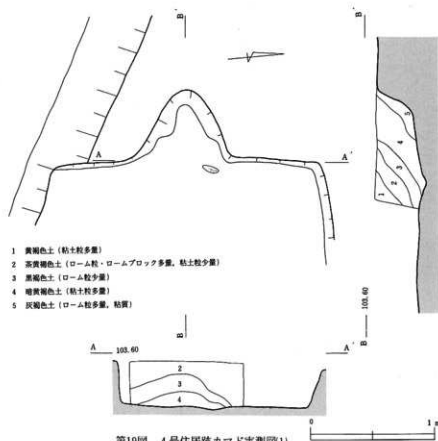
- | | | |
|------------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1 赤褐色土 (ローム粒少量) | 9 赤褐色土 (ローム粒・凝灰石少量、薄い) | 13 赤褐色土 (ローム粒多量) |
| 2 赤褐色土 (ロームブロック少量) | 10 赤褐色土 (ロームブロック少量) | 14 赤褐色土 (ロームブロック多量) |
| 3 赤褐色土 (ロームブロック多量) | 11 明褐色土 (ロームブロック多量) | 15 赤褐色土 (ローム) |
| 4 灰白色土 (ローム粒・粘土粒少量、小砂利を多量混入) | 12 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量) | |
| 5 赤褐色土 (ロームブロック少量) | | |
- 0 2 m

第18図 4号住居跡実測図

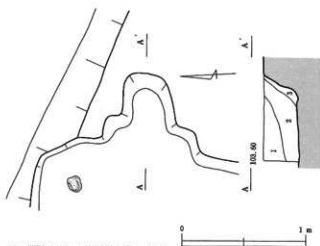
床面は、ほぼ凹凸のない平坦な面となっている。周溝は認められなかった。柱穴は、貯蔵穴の南西に1本(P₁)、竪穴外に1本(P₂)検出された。それぞれの深さはP₁が28cm、P₂が30cmであり、P₁-P₂間の距離は3.28mを測る。この他については、精査したが柱穴とみられるものは検出されなかった。なお、貯蔵穴のすぐ南側に浅いピットを1個(P₃)検出した。これは、径24cm、深さ14cmの円形ピットである。貯蔵穴は、東側カマドの右脇から検出されている。平面形は50×36cmのやや南北に長い長方形であり、深さは44cmを測る。

カマドは、東壁の北コーナー寄りおよび、西壁のやや北コーナー寄りから検出されている。まず西壁から検出されたカマド(1)であるが、壁を「V」字状に約60cm切り込み、煙道部を作り出しならかな傾斜をもって立ち上がらせている。袖部と思われる部分一帯には多量の粘土および粘土ブロックが認められたが、明瞭な形での袖部は認識することはできなかった。また、燃焼部に当たる部分についても、若干掘り凹められていたが、本カマドのどの部分からも焼土等を検出することはできず、これらのことからおそらく未使用のカマドであると考えられる。

次に、東壁から検出されたカマド(2)についてであるが、遺構確認の段階ですでに、白色粘土およ



び粘土ブロックが広範囲にしかも密に認められ精査したが西壁のカマド同様、明瞭な形での軸部等を認識することはできなかった。壁への掘り込みは、幅約80cm、長さ約70cm程で煙道部は凸形状に突出して切り込まれており、約70度の傾斜で立ち上がる。燃焼部は、ほとんど掘り込みを持たず、煙道部直下がわずかに掘り込まれているのみで、本カマドにおいても焼土等を検出することができなかった。

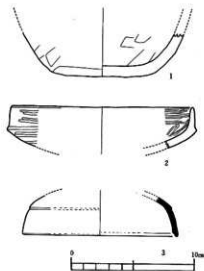


第20図 4号住居跡カマド実測図2

(2) 遺物について (第21図)

本住居跡から検出された遺物はすべて土器であり、図示し得たのは、土師器2点(1, 2)と須恵器1点(3)の計3点である。2と3は、いずれも覆土中層より出土し、1についてはみ床面から検出された。

1の甕は、底部のみであり径は8.6cmを測る。2の杯は、内外面とも黒色を呈するもので、体部外面に稜をもち口縁部がやや内傾する形のものである。体部外面および内面は丁寧なヘラ磨きで仕上げられている。3は、蓋の口縁部片である。稜部外面には、一条の沈線がめぐり、口唇部内面には凹線がめぐるもので、内外面ともクロロナデ調整されている。粘土は密で1mm程の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈し、残存高は、3.1cmを測る。なお、各出土土器の特徴は第6表に示したとおりである。



第21図 4号住居跡出土土器実測図

この他の破片資料については、第7表にて取り扱っているが、そのほとんどが覆土中～上層にかけて検出された。

番号	種類 (現存数)	口徑 高さ (m)	器形の特徴	調査の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師罎 — (K)	8.1	底部のみ残存	胴部下平から底部にかけてヘラナデ	底部へう割り	胎土はやや粗、1mm程度の小石を少量混入。 焼成は良好、褐色を呈する。 貯蔵穴周囲の平面出土。
2	土師罎 — (K)	14.8	体部外面に壁を有して口縁部はやや内傾する。	口縁部から底部にかけて丁寧なヘラ磨き	口縁部は横ナデ磨へう磨き、体部は丁寧なヘラ磨き	胎土は粗、焼成は良好。色調は内外面とも黒色を呈する。腹土中層より出土。
3	灰土罎 — (A)	12.6	底部外面に一角の穴開がめくり、口縁部内面に焼成がめぐる。天井部は欠損。	コクロナデ	コクロナデ	胎土は粗、1mm程度の砂粒を少量混入。焼成は良好で褐色色を呈する。口縁部のほぼ中央腹土中層より出土。

第6表 4号住居跡出土土器観察表

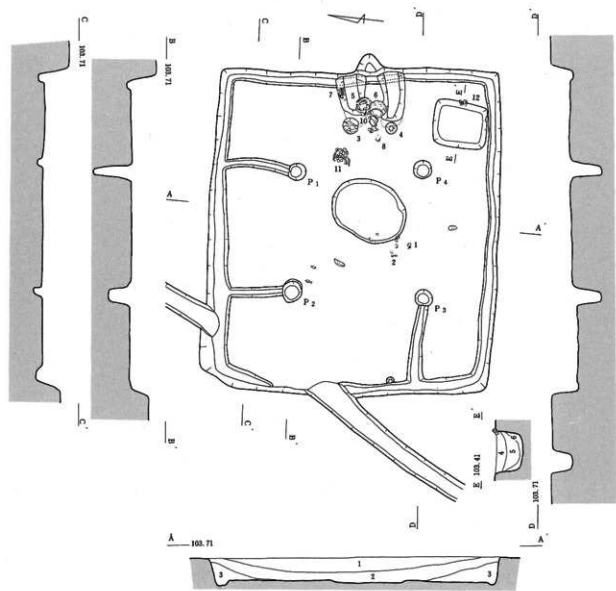
種別	土 師 器										灰土罎	土師製土器	その他	合計		
	罎			罎				罎							口縁部	石
	部位	口縁部	口縁-体部	体部	口縁部	口縁-体部	体部	口縁部	口縁-体部	体部						
出土 地点・ 層位	腹土上層	1	1	4		1	2	1		1		1	1	13		
	腹土中層	10	10	49	2	5	7	5		2		4		134		
	貯蔵穴 腹土上層			1										1		
	貯蔵穴 腹土中層			1										1		
合 計	11	11	55	2	5	8	7	1	2	1	4	1	1	149		

第7表 4号住居跡土器破片資料

5号住居跡 (S15)

(1) 遺構について (第22・23図)

本住居跡は4号住居跡の西約8mの地点より検出されたものであり、この地区については仮設道路がつくられた南側部分を除いて、擾乱等が少なかったことから遺構自体の遺存状況は良好である。平面形はほぼ長方形で、南北長4.7m、東西長5.2mを測る。遺構検出面からの掘り込みの深さは約40cmと比較的深く、壁の立ち上がり方も約80度と鋭い。床面はほぼ平坦であり、全体的に固く踏み固められているが、主柱穴に囲まれた中央部分については楕円形に若干掘り凹められており、中からは焼土および炭化物が検出されている。

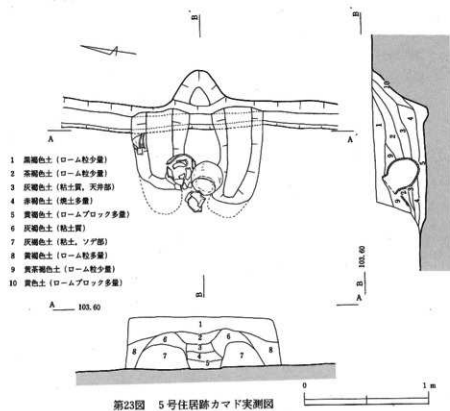


- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色土 (ローム粒少量) | 4 暗赤褐色土 (ローム粒少量) |
| 2 赤褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒土・炭化物少量) | 5 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量) |
| 3 黄褐色土 (ロームブロック多量) | 6 黄赤褐色土 (粘土粒・黒土少量) |

第22図 5号住居跡実測図

主柱穴はほぼ対角線上に配された4本であり、それぞれの中心間の長さは、 $P_1 - P_2$ が1.58m、 $P_2 - P_3$ が1.80m、 $P_3 - P_4$ が1.76m、 $P_4 - P_1$ が1.72mである。また、各柱穴の深さは、それぞれ P_1 が64cm、 P_2 が36cm、 P_3 が48cm、 P_4 が52cmである。貯蔵穴は、東南コーナーに掘り込まれており、84×74cmの長方形プランを呈し、床面からの深さは50cmである。周溝は、西壁の一部を除いてほぼ全周にわたって掘りめぐらされており、幅は、16~34cm、深さ5~10cm程で、それぞれが壁の直下に存する。このうち、北、西壁については、これらの周溝と、 P_1 、 P_2 、 P_3 の各主柱穴を結ぶ形の内側へ直角に延びる溝が3本検出されている。それらは、 P_1 に至る溝が、幅約14cm、長さ約102cm、 P_2 に至る溝が、幅約15cm、長さ約85cm、 P_3 に至る溝が、幅約18cm、長さ約118cmを測る。ここで注目すべきは、東壁の周溝についてであり、東壁に付設されたカマドの下にも周溝が回っており、カマドを構築する時点で周溝を埋めたことがうかがえる。

カマドは東壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への掘り込みは、長さ約40cm、幅約45cmで比較的浅く、壁の立ち上がり部分を若干残している。天井部および袖部は、褐色粘土で構築されており、袖部の先端には、壘形土器を倒立させて、その周囲を粘土で固めている。なお、カマド内からは、一方は割れているが、並置された状態で壘形土器が2個検出されており、割れた壘形土器の下からは、河原石の支脚が検出されている。燃焼部には特別な掘り込みは認められず全体がわずかに低くなっている程度である。



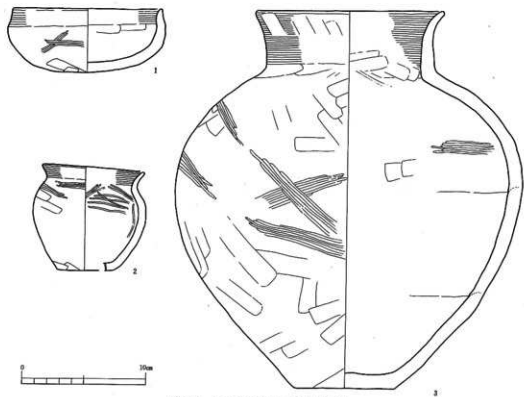
第23図 5号住居跡カマド実測図

(2) 遺物について

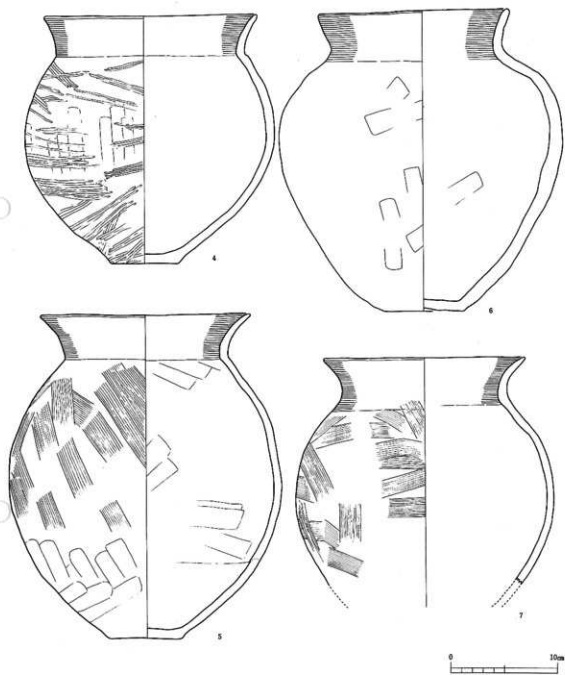
本住居跡から検出された遺物は土器(第24・25・26図)である。

検出された遺物は、土師器、須恵器であり、そのうち図示し得たのは、土師器のみで、坏1点(1)、
甕8点(2-9)、埴1点(10)、甌2点(11, 12)の計12点である。

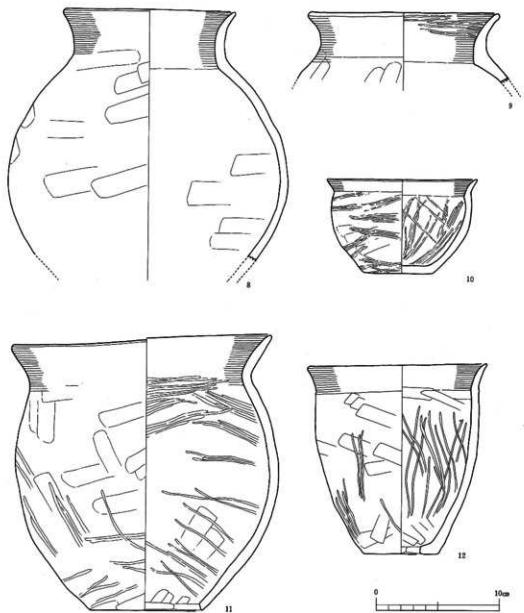
1の坏および2の甕は、焼土や炭化物が検出された中央部分の掘り込みのすぐ西側から、かなり破片となった状態で出土した。いずれも床面直上より検出されたものである。3, 4は、カマドの両袖部先端から倒立した状態で検出されたもので、口縁部を床面にびったりつけ廻りは粘土で固められていた。5, 6は、いずれもカマド中央部から出土した甕であり、5は割れた状態、6はやや横になった状態で出土した。7は、左袖部の脇から口縁部が割れて重なった状態で検出された。この遺物には多量の粘土が付着していたことから、袖部の補強材として用いられたものであると考えられる。8は、カマドのすぐ西側の床面直上から割れた状態で出土した。7, 8については、いずれも検出した時点ですでに胴部下半は欠損しており、精査したが付近から検出することはできなかった。9は、P₃の北東の覆土中層より出土した甕の口縁部片である。10は、カマドの中央部から出土した5の甕のすぐ西側下部より割れた状態で検出されたもので、口縁部がやや欠損している。11は倒立して出土した3の甕の西側から出土したものであり覆土下層より割れた状態で検出された。12は、東南コーナーの貯蔵穴の北壁際、覆土上層より底部を上にして検出されたものである。



第24図 5号住居跡出土土器実測図1)



第25图 5号住居跡出土土器実例(2)



第26図 5号住居跡出土土器実測図(3)

なお、各土器の法量および調整の特徴等については第8表に、検出された他の破片資料については第9表に示したとおりである。

番号 (保存番号)	器種 (形状)	口径 高さ (cm)	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師器 杯 (5)	11.9 5.1 (6.4)	外面に軽い稜を有す、口縁部はやや内傾	口縁部横ナデ 体部へラナデ	口縁部横ナデ、体部へラナデ後若干のへラ磨き	胎土はやや粗、底部に5mm程の小石を含む。焼成はや不良、色調は暗褐色を呈する。中央部の磨り込み西側表面出土
2	土師器 壺 (5)	18.2 (8.2) (4.4)	口縁部はやや外反、胴部上位に最大径(9.0)ミニチュア	口縁部横ナデ 胴部へラ磨き	口縁部横ナデ、胴部へラナデ後若干へラ磨き	胎土は密、焼成は良好、色調は内面および外面胴部下半が黒褐色を呈し、他は赤褐色を呈する。中央部の磨り込み西側表面出土
3	土師器 壺 (完形)	15.2 30.2 8.2	頸部が直立し、口縁部がやや外反する。胴部は球形を呈し中位に最大径(27.8)	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ後若干へラ磨き	口縁部はヘラナデ後若干へラ磨き	胎土はやや密、焼成は良好、胴部外面が一部黒褐色を呈するが他は赤褐色。カマド左袖部の先端に磨き立てて出土
4	土師器 壺 (完形)	19.7 22.7 6.4	口縁部はゆるやかに外反する。胴部は球形を呈し、中位に最大径(23.1)下半部はやすまぼる	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ後横位のへラ磨き	胎土はやや密、焼成は良好、色調は3回線胴部外面が一部黒褐色を呈する他は赤褐色を呈する。カマド右袖部の先端に磨き立てて出土
5	土師器 壺 (ほぼ完形)	19.4 29.8 6.8	口縁部はゆるやかに外反する。胴部は膨らみ中位に最大径(25.2)	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ	口縁部は横ナデ、胴部は上半が斜位のハケリ。下半が斜位のへラ磨り	胎土は密、0.1mm程の黒色粒を少量含む。焼成は良好、色調は暗褐色を呈し、胴部外面は一部黒褐色を呈する。カマド中央部出土はく落が激しい
6	土師器 壺 (完形)	18.2 27.8 7.4	口縁部はややゆるく外反する。胴部はやや球形を呈し下半部はすまぼる。中位に最大径(26.3)	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ	胎土は密、0.1mm程の黒色粒を少量含む。焼成は良好、色調は褐色を呈し一部外面は黒色を呈する。カマド中央部出土はく落が激しい
7	土師器 壺 (5)	18.6 — —	口縁部はゆるやかに外反する。胴部は球形を呈する。胴部下半欠損	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目、一部へラ磨き	胎土はやや密、砂粒を少量含む。焼成はやや不良、色調は暗褐色を呈し、一部黒色を呈する。カマド左袖部裏土8層より出土
8	土師器 壺 (5)	13.9 — —	頸部が立ち上がり、口縁部がやや外反する。胴部はほぼ球形を呈すると考えられる	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ	胎土はやや密、0.1mm程の黒色粒を少量含む。焼成は良好、色調は褐色を呈するが胴部外面は一部黒褐色を呈する。カマド西側表面出土
9	土師器 壺 (5)	15.4 — —	口縁部は外反する	口縁部横ナデ後横位のへラ磨き内面に弱い稜を有する	口縁部は横ナデ、胴部から体部にかけてへラナデ	胎土は密、焼成は良好、色調は褐色を呈する。P3の北東部土層から出土
10	土師器 壺 (5)	(12.2) 7.5 5.8	半球形の胴部を呈し、底部は平底、口縁部は外傾し、内面に軽い稜をもつ	口縁部横ナデ 体部へラ磨き	口縁部横ナデ、体部へラナデ後横位のへラ磨き	胎土はやや密、焼成は良好、色調は褐色を呈する。カマド中央部5の裏の下部より出土、内面一部はく落が認められる
11	土師器 瓶 (ほぼ完形)	20.9 21.9	口縁部は外反する。胴部はやや丸味をもつて下がる。胴部中位に最大径(21.2)	口縁部は横ナデ、胴部へラナデ後へラ磨き	口縁部は横ナデ、胴部はへラ磨り後へラ磨き	胎土は密、焼成は良好、色調は赤褐色を呈するが一部火を受けて黒色を呈する。カマド北西置下層出土、孔部はへラ磨り
12	土師器 瓶 (ほぼ完形)	14.5 15.2 6.0	口縁部はやや外反する。平底で径2cm前後の円孔を有す小壺	口縁部横ナデ 体部へラナデ後へラ磨き	口縁部横ナデ、体部へラ磨り後若干へラ磨き	胎土は密、1-2mmの砂粒少量混入。焼成は良好、色調は外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。貯蔵穴裏土上層出土

第8表 5号住居跡出土土器観察表

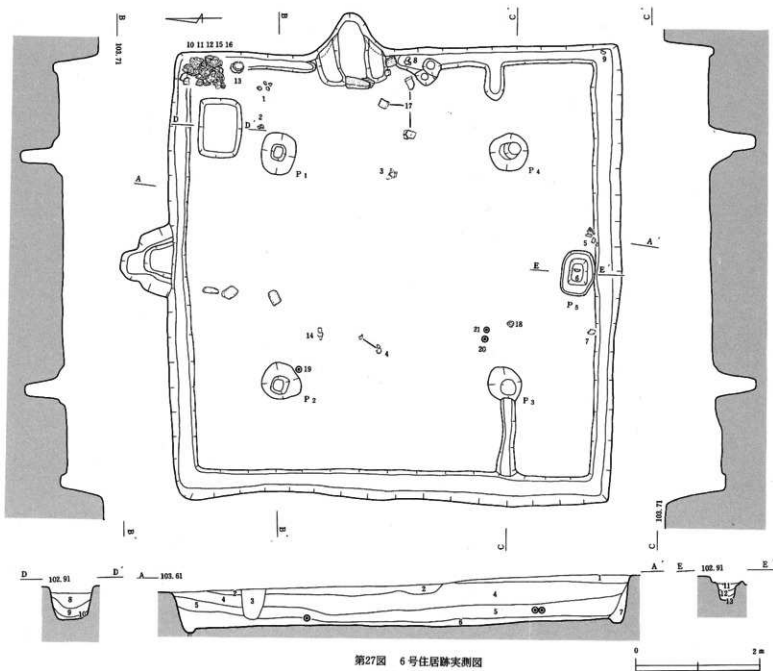
種別	土 師 器									合計
	壺					坏			甗	
部位	口縁部	口縁-体部	体部	体-底部	底部	口縁-体部	体部	体-底部	体部	
出土	覆土上層	1		4		1	1	1	1	10
	覆土中層		1	26	2	1			2	32
	覆土下層	2	1	27						30
地点	カマド袖部 (覆土8層)	2		14		2				18
	貯蔵穴 (覆土1層)	2	1	12	12					27
	貯蔵穴 (覆土3層)			1						1
合計	7	3	84	14	4	1	1	3	1	118

第9表 5号住居跡土器破片資料

6号住居跡

(1) 遺構について (第27・28・29図)

本住居跡は5号住居跡の北西4mから検出されたものである。平面形はほぼ正方形を呈し、大きさは南北7.28m、東西7.12mを測り、本調査で検出された住居跡の中では最大である。壁はロームをしっかりと掘り込んで構築されており、確認面からの深さは約60～70cmである。壁の残存状態は比較的良好で、南壁部分が仮設道路敷設の際に若干削られているものの、立ち上がりの角度は約80～85度と急である。床面はほぼ平坦で、全体的に良く踏み固められている。主柱穴は4本でほぼ対角線上に位置する。掘り方はいずれも不整形で掘り込み面での径は約30～62cmと大きい。各柱穴の深さはP₁が60cm、P₂が65cm、P₃が88cm、P₄が74cmであり、各柱穴間の距離はP₁-P₂が3.0m、P₂-P₃が3.0m、P₃-P₄が3.1m、P₄-P₁が3.1mである。また、P₃-P₄の柱穴はほぼ中間、南壁際に長方形ピットが検出されている(P₅)。大きさは72×54cmで、深さは32cmを採る。周溝は、東壁のカマド部分を除いて約40cmの幅ではほぼ全周するが、北壁のカマド部分については20cmとややせまくなる。なお、本住居跡においても5号住居跡同様、周溝から柱穴に延びる溝が一本検出されている。幅は約20cm、長さ約120cmを測る。貯蔵穴は、北壁のカマドの東側、北東コーナー寄りから検出されている。平面形は96×68cmの東西に長い長方形であり、床面は平らで床面からの深さは52cmを測る。

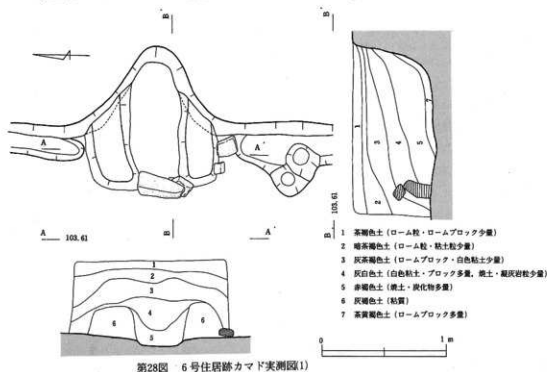


- 1 明黄褐色土 (小砂粒を多量、固い)
 - 2 暗黄褐色土 (ローム粒少量)
 - 3 褐色土 (ローム粒少量)
 - 4 茶褐色土 (ローム粒・炭灰粒少量)
 - 5 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量)
 - 6 黄褐色土 (ロームブロック多量)
 - 7 明黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量)
 - 8 黄褐色土 (ローム粒・炭化物・粘土粒少量)
 - 9 茶黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック・炭化物多量)
 - 10 黄褐色土 (ロームブロック多量)
 - 11 茶黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量)
 - 12 黄褐色土 (ローム粒少量)
 - 13 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量)
- ④14 117

第27図 6号住居跡実測図

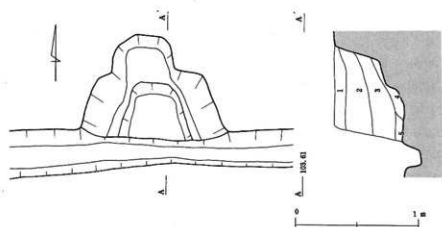
カマドは、北壁のほぼ中央と東壁のやや北寄りから検出されている。

まず、東壁から検出されたカマド(1)であるが、壁を「V」字状に60cm程切り込み、煙道部をつくり出して、約70度の傾斜をもって立ち上がらせている。大きさは、奥行が120cm、幅が壁際で120cm、焚口部で40cmである。袖部および天井部は褐色粘土を用いて構築されており、特に焚口部は、凝灰岩切石によって補強されている。凝灰岩は、右袖部の先端および左袖部と右袖部をつなぐ形で2個検出されており、長さは、前者が31cm、後者が40cm、同様に、幅は16cm、16cm、厚さは6cm、9cmである。両凝灰岩とも比較的丁寧に加工されている。燃焼部については、特別な掘り込みは認められず、全体がわずかに4～5cm程低くなっているのみであった。



- 1 茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量)
- 2 暗褐色粘土 (ローム粒・粒土少量)
- 3 灰褐色粘土 (ロームブロック・白色粘土少量)
- 4 灰白色土 (白色粘土・アロク多量、黄土・凝灰岩粒少量)
- 5 茶褐色土 (黄土・炭化物多量)
- 6 灰褐色土 (粘質)
- 7 茶褐色粘土 (ロームブロック多量)

次に北壁から検出されたカマド(2)についてであるが、このカマドの存在は遺構確認の段階では粘土が検出されなかったこと等により確認できず、壁出しの段階になって「U」字状の断面が認められたことで判明したものである。その大きさは、奥行が82cm、幅が壁際で120cmであり、煙道は凸形状に突出して切り込まれた上、階段状を呈して約75度の傾斜をもって立ち上がっている。袖部および天井部は認められず、本カマドの南西床面から構築材と思われる凝灰岩の切石と白色粘土を検出したのみであった。凝灰岩は3個でいずれもきれいに仕上げられており火を受けた痕跡が認められる。大きさは、大きいものから・長さ30cm、幅25cm、厚さ9cm、・長さ25cm、幅18cm、厚さ8cm、・長さ22cm、幅15cm、厚さ8cmを測る。特に、この凝灰岩に関しては、1個の大きな凝灰岩を三つに分けて使用したのと考えられ、注目される。



- 1 赤褐色土（ローム層・粘土粒少量）
 2 赤褐色土（ロームブロック・凝灰岩ブロック少量）
 3 灰赤褐色土（白色粘土ブロック粒・ロームブロック少量）
 4 赤褐色土（ロームブロック・粘土粒・凝灰岩粒少量）
 5 灰褐色土（ロームブロック少量）

第29図 6号住居跡カマド実測図②

(2) 遺物について（第30・31・32図）

本住居跡から検出された遺物は、土器と鉄器である。

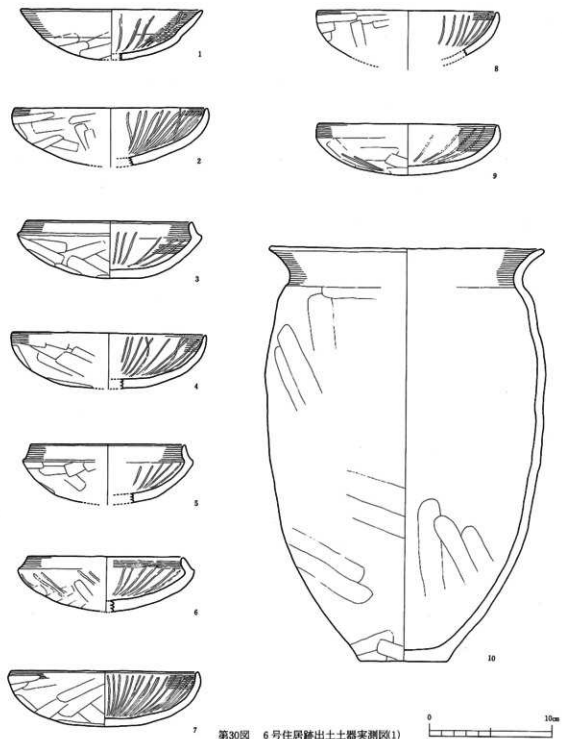
・土器 検出された遺物は、土師器、須恵器であり、そのうち図示し得たのは、土師器、坏9点（1～9）、甕5点（10～14）、甗3点（15～17）、須恵器、坏1点（18）の計18点である。

1～6の坏はすべて床面直上より検出されたものである。1の坏は東壁カマドの西側、2の坏はP₁のすぐ東側から割れた状態で出土し、3の坏は住居跡中央部やや東側、4の坏は中央部やや西側より、また5の坏は南壁のほぼ中央から、それぞれ割れた状態で検出された。6の坏については、P₅の中央部覆土上層から半分のみ出土した。7～9の坏は、本住居跡の覆土下層より検出されたもので、7は南壁近く、8は東壁カマドのすぐ南より、また、9は南東コーナーの壁際より、それぞれ出土した。10～13の甕および15、16の甗については、本住居跡の北東コーナー部分より一括して検出された。これらはすべて床面直上から出土したもので、東西約60cm、南北約100cmの範囲内に密集する形で、割れて折り重なるようにして検出された。14の甕は、P₂のすぐ南東の床面から、また、17の甗は、東壁カマドのすぐ西側の覆土下層より出土した。それぞれの残存は、⅜、⅝である。18は須恵器の坏であり、P₃の東側、覆土上層より出土した。口径は推定12.5cm、器高3.8cm、底径5.7cmを測り、切り離し技法は、回転糸切りである。

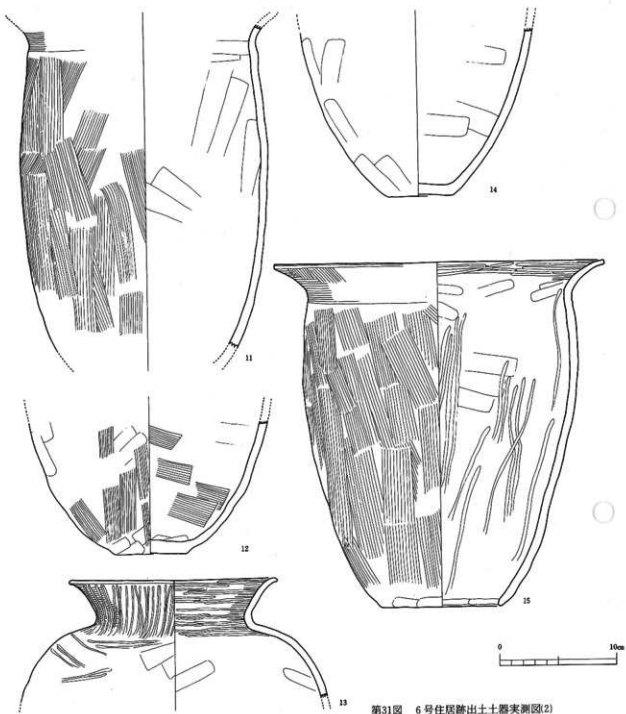
・鉄器、刀子が3点（19～21）検出されている。いずれも覆土中層から出土したもので、P₂の南側から1点（19）P₃の南側から2点（20、21）検出された。

これ以外の出土遺物としては、川原石が多数検出されている。大きさも、10cm前後のものから25cmぐらいのものと同様であるが、比較的類似した形の川原石が、床面および覆土下層より出土している。これらの中には、火を受けた痕跡のある川原石が4点程認められる。

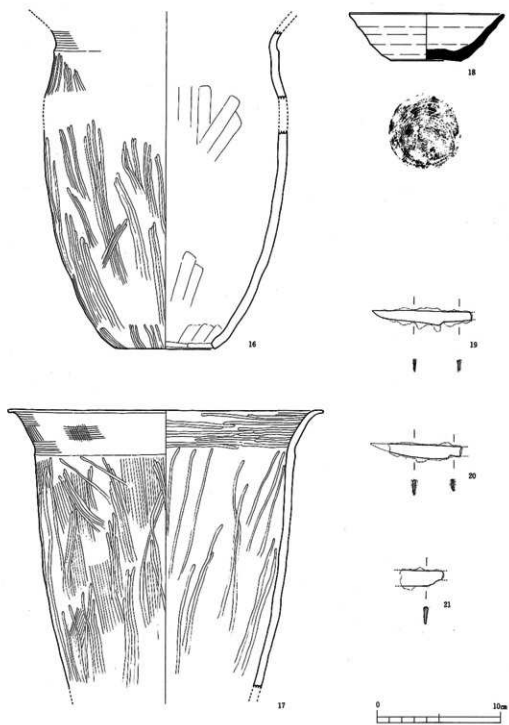
なお、各出土遺物の特徴等については、第10・11表に、また、検出された他の破片資料については、第12表に示したとおりである。



第30图 6号住居跡出土土器実測図(1)



第31图 6号住居跡出土土器実測图(2)



第32图 6号住居群出土遺物(美濃国3)

器 器 号 (残存量)	口 径 器 高 底径(m)	器 形 の 特 徴	調 整 の 特 徴		粘土・焼成・色調・その他
			内 面	外 面	
1 土 師 器 杯 (5)	15.7 (4.1) —	体部外面約3/4に鋭い稜を有す 口縁部は外反	口縁部は横ナデ、 体部は横ナデ後へう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土はやや粗、焼成は良好、 色調は内面と外面の口縁部が 暗褐色 体部から底部にかけて 黒褐色を呈する。東側 カマドの西側部面出土
2 土 師 器 杯 (5)	(15.8) (4.7) —	半球形状を呈し、口縁部は やや内傾する	口縁部は横ナデ、 体部はへう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土は密、焼成は良好、色調は 暗褐色を呈する。P1の東側部面 出土
3 土 師 器 杯 (はば完形)	15.4 4.5 —	体部外面に稜を有し口縁部は 内傾する	口縁部は横ナデ、 体部は横ナデ後へう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土はやや粗、焼成はやや良、 色調は暗褐色を呈する。住居跡は ほぼ中央部床面より削れた状態 で出土
4 土 師 器 杯 (5)	(15.7) (4.4) —	やや扁平な半球形状を呈す、 口縁部はわずかに直立する	口縁部は横ナデ、 体部は放射状のへう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土はやや粗、焼成は良好、 色調は赤褐色を呈する。住居跡 中央部やや西側部面より出土
5 土 師 器 杯 (5)	(12.4) (4.8) —	体部外面に稜を有し口縁部は 内傾する	口縁部は横ナデ、 体部はへう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土は密、焼成は良好、色調は 全体に黒褐色を呈する。南壁側 部面直上より出土
6 土 師 器 杯 (5)	(12.4) (4.5) —	体部外面に稜を有し口縁部は 内傾する	口縁部はへう先に て磨き、体部もやや粗な へう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り後 若干へう磨き	粘土はやや粗、焼成は良好、 色調は暗褐色を呈する。住居跡 P5内壁上層より出土
7 土 師 器 杯 (5)	(15.2) 4.5 —	やや扁平な半球形状を呈し、 口縁部は短くわずかに内傾する	口縁部は横ナデ、 体部はやや密な放射状の へう磨き	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り	粘土は密、焼成は良好、色調は 内面が黒褐色、外面は暗褐色を 呈する。住居跡南壁側壁土下層 より出土
8 土 師 器 杯 (5)	(14.7) (4.7) —	半球形状を呈し口縁部は わずかに内傾する	口縁部は横ナデ、 体部はへう磨き	口縁部は横ナデおよび へう割り、体部はへう割り	粘土は密、焼成は良好、色調は 暗褐色を呈する。住居跡東側 カマド東南壁土下層より出土
9 土 師 器 杯 (5)	(14.6) 4.1 —	やや扁平な半球形状を呈し、 口縁部はやや内傾する	体部をへう磨きした後口縁部 から体部上平にかけて横ナデ、	口縁部は横ナデ、 体部はへう割り後若干の へう磨き	粘土は密、焼成は良好、色調は 内面および外面口縁部が黒褐色、 他は暗褐色を呈する。住居跡南 東コーナー壁壁土下層より出土
10 土 師 器 壺 (5)	(22.2) (33.2) 7.0	口縁部は外反し、胴部は やや膨らむ、直胴気味	口縁部横ナデ、胴部 へうナデ	口縁部は横ナデ、 胴部はへうナデ	粘土はやや粗、焼成は良好、 色調は全体に暗褐色を呈する。 住居跡北東コーナー床面より 出土

第10表 6号住居跡出土土器観察表(1)

11	土師器 壺 (3)	— — —	口縁部および底部が欠損	胴部ヘラナゲ、	胴部はやや密な縦位のハゲ目調整	胎土はやや密、焼成は良好、色調は全体に暗褐色を呈する。住居跡北東コーナー床面出土
12	土師器 壺 (3)	— — 6.1	胴部下平のみ残存	胴部ヘラナゲ、	胴部ヘケ目調整 底部ヘケ削り	胎土はやや粗、焼成は不良、色調は灰褐色を呈する。住居跡北東コーナー床面出土
13	土師器 壺 (3)	17.5 — —	口縁部は大きく外反する 胴部下平欠損	口縁部は横ナゲ後縁位のヘラ磨き	口縁部は横ナゲ後縁位のヘラ磨き	胎土は密、焼成は良好、色調は灰褐色を呈すが、外面の一部は赤褐色および黒褐色を呈する。住居跡北東コーナー床面出土
14	土師器 壺 (3)	— — 5.6	胴部下平のみ残存	胴部ヘラナゲ	胴部ヘケ削り	胎土はやや密、焼成は良好、色調は灰褐色を呈する。P ₁ の南東床面より出土
15	土師器 瓶 (3)	(28.0) 29.0 10.2	大形で単孔式、口縁部は外面に稜をもって外反する	口縁部は横ナゲ後ヘラ磨き、胴部はヘラナゲ後縁位のヘラ磨き	口縁部から胴部にかけてハゲ目調整、口縁部はその後横ナゲ	胎土はやや密、焼成は良好、色調は灰褐色を呈すが外面の一部は黒褐色を呈する。住居跡北東コーナー床面より出土
16	土師器 瓶 (3)	— — 8.2	口縁部はほぼ欠損、外面に稜を有す	胴部はヘラナゲ	胴部は密なヘラ磨き	胎土はやや密、焼成は良好、色調は灰褐色を呈すが外面の一部は黒褐色を呈する。住居跡北東コーナー床面より出土
17	土師器 瓶 (3)	(25.3) — —	口縁部は外面に弱い稜をもって外反する	口縁部は横位のヘラ磨き、胴部は縦位のヘラ磨き	口縁部から胴部にかけてハゲ目調整後、口縁部は横ナゲ胴部は縦位のヘラ磨き	胎土はやや粗、焼成は良好、色調は全体に暗褐色を呈す。東庭カマドのすぐ西側覆土下層出土
18	須恵器 坏 (3)	(12.5) 3.8 5.7	体部は外上方向斜的にのびる	ロクロ成形	ロクロ成形、回転糸切り	胎土は微砂粒を含む、焼成は良好、灰色を呈す。P ₁ の東側覆土上層より出土
番号種別 特徴・出土位置・その他						
19	刀子	刀長5.7cm 茎長2.1cm 身幅1.0cmを測る、区の状態は、刀側から小さな角をなして茎に至る。平棟、平造りであると思われる。 錆化が著しい、P 2の南側、覆土中層より出土				
20	刀子	刃部を欠損する。残存長6.0cm鉄製で錆化が著しいが区の状態は刀側から小さな角をなして茎に至る。平棟、平造りであると思われる。P 3の南側、覆土中層より出土				
21	刀子	刃部、茎尻を欠損する。残存長3.6cm、鉄製で錆化が著しい、区部は欠損している為、その形状は不明である。 平棟、平造りであると思われる。P 3の南側、覆土中層より出土				

第11表 6号住居跡出土遺物観察表

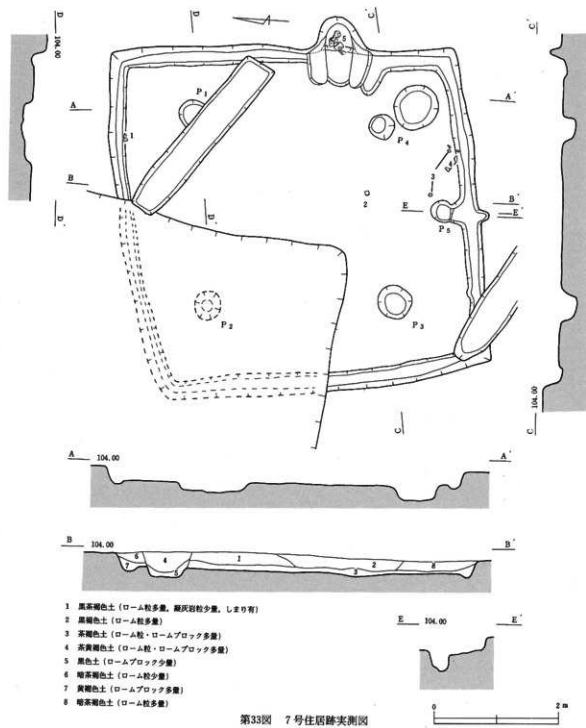
種別	土 器											須 恵 器	石	其 他	合 計		
	甕			坏			高坏	甗	甕		环						
部 位	口縁	口縁	体	底	口縁	体	脚	体	口縁	体	口縁	体					
	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部					
出土	覆土上層	11	12	125	6	2	10	7	2		1	5	1	5	1	188	
	覆土中層	20	25	382	9	3	35	33	1	1	1	9	1	2	20	3	545
地点	覆土下層	3	2	108	1	4	7	3		1		3		24	1	157	
	東壁カマド (覆土3層)		1	2												3	
層位	P5 覆土上					1										1	
合 計	34	40	617	16	9	53	43	3	2	1	1	17	2	2	49	5	894

第12表 6号住居跡土器破片資料

7号住居跡(S17)

(1) 遺構について(第33・34図)

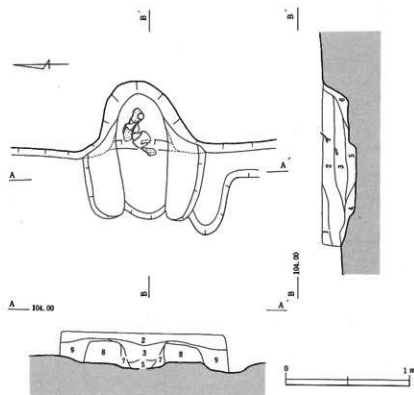
本住居跡は、調査地区の西側、やや市道寄りから検出されたものである。本住居跡は、8号住居跡と切り合う形で検出され、本住居跡のカマド部分が、8号住居跡の西壁寄りに構築されていることが確認面から把握できた。このことから、本住居跡は、8号住居跡が埋没した後につくられたと判断することができる。平面形は、北壁の西半分および西壁の北半分について攪乱を受けているものの、残存南北長5.9m、東西長5.5mを測り、やや南北に長い長方形を呈する。壁の掘り込みは全体に浅く、確認面からの深さは、東、南壁で約22cm、西、北壁で約24cmである。床面は上記攪乱により、北西部分、また、P₁付近、南西コーナー部分についても壊されており、その他、カマド部分および中央部においても若干の凹凸が認められる。主柱穴は4本で、ほぼ対角線上に位置する。(P₂については攪乱が浅く、約10cmの掘り込みが認められた。)掘り方はいずれも円形で掘り込み面での径は約40~52cmである。各柱穴の深さはP₁が14cm、P₃が28cm、P₄が22cmであり、各柱穴間の距離は、P₁-P₂(推定)が2.6m、P₂-P₃が2.5m、P₃-P₄が2.4m、P₄-P₁が2.6mである。また、P₃-P₄の柱穴のほぼ中間、南壁際にも円形ピット(P₅)が検出されている。大きさは32×36cmで深さは32cmを測り、これに対応する位置の壁が張り出す形で、約16cm程掘り込まれている。周溝は、やや北壁部分がせまくなるが約30cmの幅で、ほぼ全周すると思われる。貯蔵穴は、東壁のカマドの南側、P₄に近接した位置から検出された。平面形は、72×68cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。



- 1 黒黄褐色土 (ローム粒多量、細灰岩粒少量、L200有)
- 2 黒褐色土 (ローム粒多量)
- 3 茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量)
- 4 赤黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多量)
- 5 黒色土 (ロームブロック少量)
- 6 暗赤褐色土 (ローム粒少量)
- 7 黄褐色土 (ロームブロック多量)
- 8 暗赤褐色土 (ローム粒多量)

第33図 7号住居跡実測図

カマドは、東壁のやや南寄りから検出されている。前述したように、8号住居跡の西壁を壊す形で構築されており、壁への掘り込みは平面形が半円状を呈し、長さが55cm、幅85cmを測る。また、立ち上がりの角度は約60度で比較的なだらかである。袖は、ローム、茶褐色土等を材料に構築されており、堅くしまっている。燃焼部の掘り方はやや南北に長い不整形形を呈し、深さは約10-12cmである。焼土も燃焼部から煙道にかけて多量に検出されている。



- | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 赤褐色土（ローム粒少量） | 4 黄褐色土（ロームブロック少量、ローム粒多量） | 7 赤黄褐色土（ローム粒・焼土少量） |
| 2 赤黄褐色土（焼土多量、炭化物・焼灰粒少量） | 5 茶褐色土（焼土多量、ローム粒少量） | 8 暗赤褐色土（ロームブロック少量、焼灰粒少量） |
| 3 赤褐色土（焼土・炭化物多量、ローム粒少量） | 6 暗赤褐色土（焼土・ローム粒少量） | 9 赤黄褐色土（ローム粒・焼土少量） |

第34図 7号住居跡カマド実測図

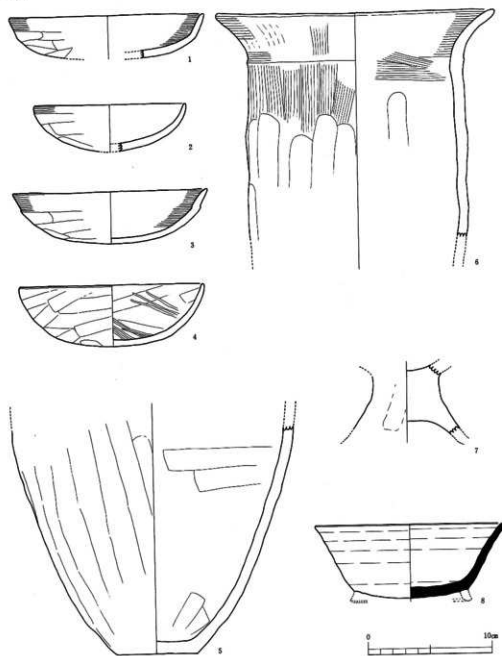
(2) 遺物について

本住居跡から検出された遺物は土器（第35図）である。

検出された遺物は、土師器・須恵器であり、そのうち図示し得たのは、土師器の坏4点（1～4）
 甕1点（5）
 高坏1点（6）、高坏1点（7）、須恵器の高台坏1点（8）の計8点である。

1～3の坏はすべて床面直上より検出されたものであり、1の坏は北壁のやや東寄りから、2の坏はP₃-P₄間のややP₃寄り、また、3の坏はP₃の北東および南壁のやや東寄りから、それぞれ割れた状態で出土した。4の坏についても、南壁際の覆土下層より割れた状態で出土した。5

の裏は、カマド中央部から出土したもので、底部を上に向け横に割れた状態で検出された。6の甕および7の高杯の脚部についてはそれぞれ、本住居跡の北西部覆土中より検出された。8の高台杯は、本住居跡の中央部やや南寄りの覆土上層から出土し、検出した段階ですでに高台部分は欠損していた。



第35図 7号住居跡出土土器実測図

各出土土器の量および調整の特徴等については第13表に、また、検出された破片資料については第14表に示したとおりである。

番号	器種 (器名)	口径 底径(m)	器形の特徴	調整の特徴		粘土、焼成、色調、その他
				内面	外面	
1	土師器 杯 (5)	(15.8) —	杯部外面に少すかた線を有し、口縁部はほぼ直線的に開く	口縁部から杯部に かけて横ナデ	口縁部は横ナデ、 杯部はへり削り	粘土は密、焼成は良好、色調は口縁部付近が暗褐色、杯部は褐色を呈する。任那館北壁やや東寄り灰土より出土
2	土師器 杯 (5)	(12.2) (3.8)	小形で半球形状を呈する。内外面ともはく蓋が着いた	はく蓋が着しく不明	口縁部は横ナデ、 杯部はへり削り	粘土はやや粗、焼成は良好、色調は褐色を呈する。任那館P3-P4間のややP3寄り灰土より出土
3	土師器 杯 (5)	(15.6) —	杯部上位外側に線を有し内面に鋭い稜をもつ半球形状を呈する	口縁部から杯部に かけて横ナデ	口縁部は横ナデ、 杯部はへり削り	粘土は密、焼成は良好、色調は内面が暗褐色を呈し、外面は褐色を呈する。任那館P5の北東および南壁のやや東寄り灰土から割れて出土
4	土師器 杯 (5)	(14.8) (4.9)	やや扁平な半球形状を呈し器縁は薄手ではほぼ均一である	口縁部から杯部に かけてヘラナデ後 へり削り	口縁部から杯部に かけてへり削り	粘土は密、焼成は良好、内面一部は暗褐色を呈すが全体に明褐色を呈する。任那館南壁敷土下層より出土
5	土師器 壺 (5)	— 6.4	胴部下半のみ残存	胴部はヘラナデ	胴部は胴位のへら削り、底部もへり削り	粘土はやや粗、焼成は良好、色調は全体に褐色を呈する。ネマド中央部より、底部を上に向かう時に灰土
6	土師器 甕 (5)	(22.0) —	口縁部および胴部上半のみ残存、口縁部外側に稜をもつて反する	口縁部は横ナデ、 胴部はヘラナデおよびへり削り	口縁部は横ナデ、 胴部は横ナデ、 胴部上位はへり削り 中央部はへり削り	粘土は密、焼成は良好、色調は内面が暗褐色を呈する他は褐色を呈する。本任那館北壁部の敷土より出土
7	土師器 高杯 (5)	残存高 5.3m	胴部のみ残存。やや太目で短し、底部は大きく開くとも思われる	はく蓋が着しく不明	はく蓋が着しく不明	粘土はやや粗、焼成は良好、色調は全体に暗褐色を呈する。任那館北西隅敷土より出土
8	須恵器 高台杯 (5)	(15.3) (9.0) (5.8)	高台部欠損体部は外上方向へ直線的にのみ縁部はわずかに反する	ロクロ成形	ロクロ成形、底部は縁部へり削り	粘土はやや粗、焼成は良好、色調は外面が暗褐色を呈し、内面は次茶褐色を呈する。本任那館中央部やや南寄りの敷土上層より出土

第13表 7号住居跡出土土器観察表

器種	土 器 類										須 恵 器	その他	合 計			
	高 杯	高 台 杯	甕	壺	杯	一 体 底	一 体 部	一 体 部	一 体 部	一 体 部						
土 師 器	4	3	92	2	6	6	2				1	1	5	128		
須 恵 器	2	1	8	1	6			1				1	1	4	23	
陶 器	8	3	99	5	9	13	1							11	151	
コップ			3	14			2	2							21	
片 断 (破片)					13	1		3							17	
砂 或 穴 (埋土)			3	5											1	9
合 計	14	19	231	9	23	24	3	1	1	2	1	2	1	21	349	

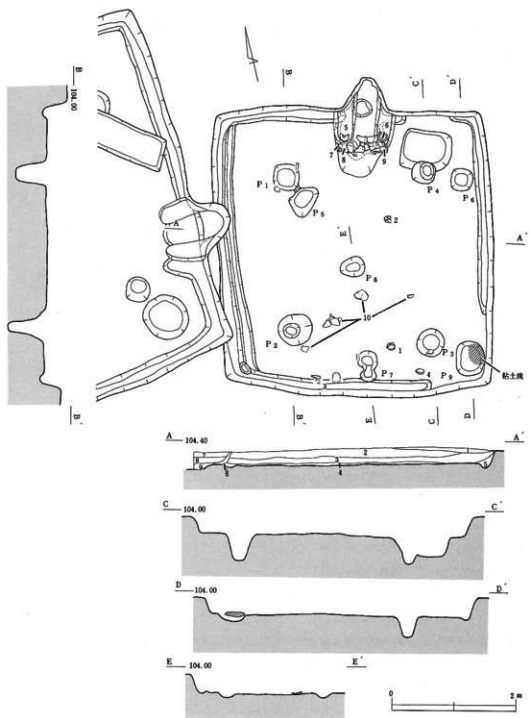
第14表 7号住居跡土器破片資料

8号住居跡(SI 8)

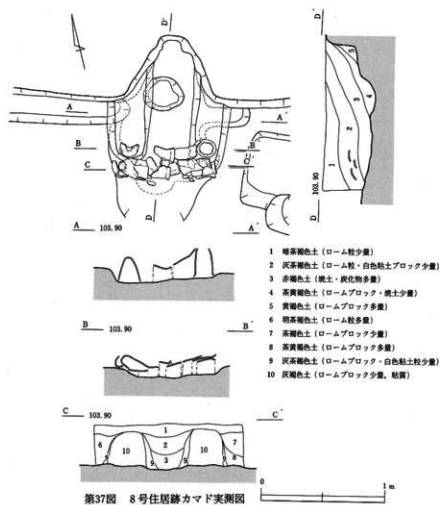
(1) 遺構について(第36・37図)

本住居跡は、西側調査地区の東端より、東壁部分が道路下にかかる状態で検出された。前述したように本住居跡は7号住居跡に切られており、そのカマド部分および北東壁部分によって、西壁の一部が壊されている。規模は、南北長4.6m、東西長4.5mを測り、平面形はほぼ正方形を呈する。壁の掘り込みは、約26cmで、東壁については、上面が簡易舗装されていたにもかかわらず、約22cmと、比較的残りは良好であった。また、立ち上がりの角度は約60-75度である。床面は全体的に凹凸のない平坦な面となっており、よく踏み固められている。主柱穴は、ほぼ対角線上に配された4本(P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4)であり、それぞれの深さは P_1 が50cm、 P_2 が58cm、 P_3 が42cm、 P_4 が40cmである。なお、主柱穴間の距離は、 P_1-P_2 が2.0m、 P_2-P_3 が1.7m、 P_3-P_4 が2.3m、 P_4-P_1 が1.8mである。この他、 P_1 のすぐ南東から P_5 が、 P_4 の東側から P_6 が、また南壁のほぼ中央から P_7 が、主柱穴に囲まれた中央部のやや南側から P_8 がそれぞれ検出されている。深さは P_5 が14cm、 P_6 が32cm、 P_7 が8cm、 P_8 が8cmである。南東コーナーからは P_9 が検出されている。深さは12cmで、覆土上層には約8cmの厚さで白色粘土塊が堆積していた。周溝は北東コーナーおよび南東コーナー付近を除いて、ほぼ全周する。幅は26cm前後で、深さは約5cmである。特に西壁部分に関しては、二重の周溝が認められ、内側の周溝を外側の周溝が切る形で検出されている。なお、内側の周溝の覆土については比較的固くしまっており、 P_5 、 P_6 の存在と考え合わせると、本住居跡は若干ではあるが西壁部分が拡張されたと考えられる。貯蔵穴はカマドの東側から検出されている。平面形は80×62cmの東西に長い長方形であり、底面は平らで床面からの深さは28cmである。また、貯蔵穴は P_4 に切られており、貯蔵穴を埋め戻した後、 P_4 を掘り込んだものと思われる。なお、 P_4 は、他のピットの中でも比較的掘り込みが深く、貯蔵穴の使用時には、柱穴として機能していた可能性が高い。

カマドは、北壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への切り込みは、長さ52cm、幅76cmを測り、比較的しっかりと掘られている。先端部はやや凸形を呈し、約75度の角度で立ち上がる。袖部および天井部は、褐色粘土で構築されており、補強材として土師器の甕が少量に用いられている。構築方法は、右袖部に甕形土器の上半部を、左袖部に甕形土器の下半部を、それぞれ倒立させ(これは別個体である)、その上に、ブリッジ状に3個の甕形土器を連結させて、右袖部の土器に口縁部を、また、左袖部の土器に小形の甕形土器の底部を載せて横位にした状態をつくり出し、その上に粘土を張りつけて構築したものである。検出時には、この構築状態がつぶれた形で確認されたが、比較的良好的土器資料を得ることができた。なお、燃焼部の掘り方は、南北に長い不整形であり、深さは5-14cmであり、覆土から焼土および炭化物が検出されている。



第36图 8号住居跡实测图



(2) 遺物について（第38・39・40図）

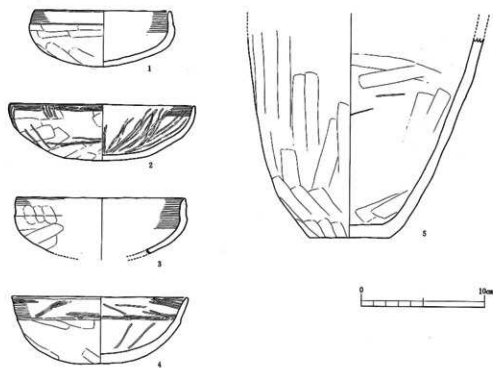
本住居跡から検出された遺物はすべて土師器であり、そのうち図示し得たのは、坏4点（1～4）、甕6点（5～10）の計10点である。

1の2の坏は、いずれも床面直上から出土したもので、1はP₇の北東、2はP₄とP₈のほぼ中間から割れた状態で検出された。3と4の坏は、それぞれ覆土中層、覆土上層から、3は南壁のやや西寄り、4はP₃の南側から検出された。5から9までの甕は、すべてカマドの構造物として用いられたものである。前述したように、5と6はそれぞれ左袖部、右袖部から倒立した状態で検出され、5は胴部下半、6は上半部のみ残存していた。7、8、9は、5と6の上に高架させる形で、つぶれてはいるが連結した状態で検出された。7の小形の甕に8の長胴の甕を、また、8に9

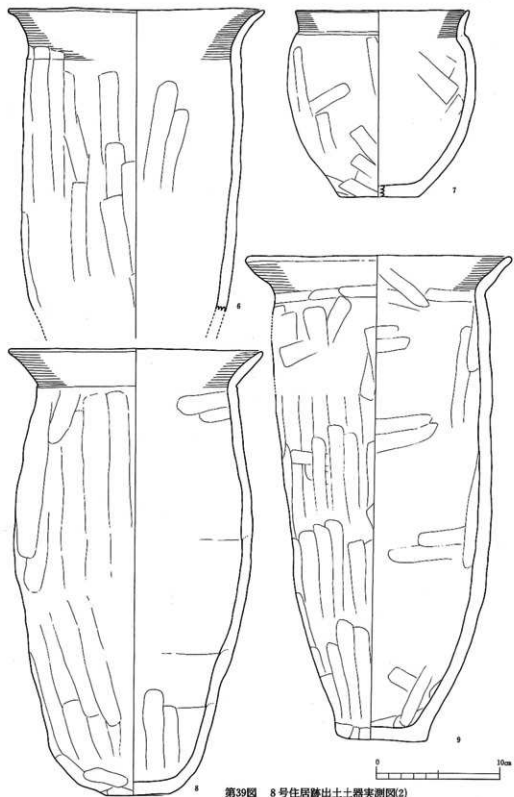
の長胴の裏を連結していたものである。そして、9の口縁部を6の上に載せ、7の底部を5の上に載せたものと考えられ、構築時には、ブリッジ状を呈していたと思われる。10の裏はP₂とP₈の南東、床面から検出されたものである。

これ以外の出土遺物としては、円形および楕円形の平たい川原石と、長さ13cm程の長細い川原石が、それぞれ対となって、P₁と南壁のやや西寄りから、床面から若干浮いた状態で検出されている。

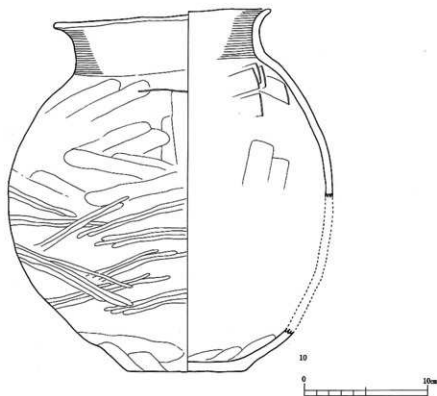
なお、各出土遺物の特徴等については、第15・16表に、また、検出された他の破片資料については、第17表に示したとおりである。



第38図 8号住居跡出土土器実測図(1)



第39图 8号住居跡出土土器実測図(2)



第40図 8号住居跡出土土器実測図3)

番号	器種 (残存量)	口径 器底径 (cm)	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師器 環 (ほぼ完形)	10.9	体部外面に縦い線を有し 口縁部はやや内傾する。	口縁部から 体部にかけて 横ナデ	口縁部は横ナデ 体部はヘラ削り	胎土は密、焼成は良好、色調は内面および口縁部外面が暗褐色を呈する。体部外面は黒色を呈する。P 5の北東床面出土。
		4.5		—	—	
2	土師器 環 (3/4)	(14.9)	やや扁平な半球形状を呈する。口縁部はわずかに直立する。	口縁部は横ナデ	口縁部は横ナデ後細いヘラ磨き	胎土は密、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。P 4とP 8のほぼ中間、床面より出土。
		4.5		—	体部は細いヘラ磨き	
3	土師器 環 (ほぼ完形)	14.2	体部外面に縦い線を有し 口外部はやや外反する半球形状を呈する。	口縁部から 体部にかけて 縦いヘラ磨き	口縁部は横ナデ後細いヘラ磨き 体部はヘラ削り磨き	胎土はやや粗、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。内外面ともほく落が激しい。P 3南側土層より出土。
		5.3		—	—	

第15表 8号住居跡出土土器観察表1)

番号	器種 (現存量)	口径 底径(cm)	器形の特徴	調査の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
4	土師器 坏 (3)	(13.6) — (3)	体部外面に軽い稜を有し、 口縁部は直立する。	口縁部から 体部にかけて 横ナデ	口縁部は横ナデ体部 はヘリ削り	胎土は黒、焼成は良好、色 調は赤褐色を呈する。底部 にかけての器厚が比較的薄 い。甕蓋の底寄り覆土中層 出土。
5	土師器 罍 (3)	— 6.5	胴部下半のみ残存。	胴部はヘラ ナデ	胴部は縦位のヘリ削 り	胎土は黒、焼成は良好、色 調は褐色を呈する。カマド 左端部にて倒立した状態で 出土。
6	土師器 罍 (3)	20.6 — (3)	口縁部は筒状の胴部から ゆるやかに外反し、胴部との 境にわずかな稜を有す。 胴部下平次皿、反胴吹味。	口縁部は横 ナデ 胴部はヘラ ナデ	口縁部は横ナデ 胴部は縦位のヘリ削 り	胎土はやや粗、焼成は良好、 色調は褐色を呈する。胴部 には白色粘土が付着してい た。カマド右端部にて倒立 した状態で出土。
7	土師器 罍 (3)	14.0 (15.0) (6.4)	口縁部と胴部の境に明瞭 な段を有し、口縁部は短 く外反する。小形。	口縁部は横 ナデ 胴部はヘラ ナデ	口縁部は横ナデ 胴部から底部にかけて ヘリ削り	胎土はやや粗、焼成は良好、 色調は内面暗褐色、外面暗 色を呈する。カマド左端部 より、倒れた状態で出土。
8	土師器 罍 (ほぼ完形)	20.3 35.9 5.0	長胴で口縁部は「く」の字 状に外反。口縁部と胴部 の境に軽い稜を有す。口 縁部に最大径(20.3)	口縁部は横 ナデ 胴部はヘラ ナデ	口縁部は縦位のヘラ 削り 口縁部は横ナデ 胴部は縦位のヘリ削 り	胎土はやや粗、焼成は良好、 色調は内面暗褐色、外面暗 色を呈する。カマドより7 と8の間に収められる形で 割れて出土。
9	土師器 罍 (ほぼ完形)	21.4 39.0 7.3	長胴で全体に厚めの器厚 口縁部は「く」状に 外反する。口縁部に最大 径(21.4)	口縁部は横 ナデ 胴部はヘラ ナデ	口縁部は横ナデ 胴部は縦位のヘリ削 り	胎土は黒、焼成は良好、色 調は赤褐色を呈する。胴部 には白色粘土が付着してい た。カマド右端部付近、横 位の状態で割れて出土。
10	土師器 罍 (3)	(17.6) (28.9) (9.6)	口縁部は外反。胴部は球 形を呈するがややゆがむ。 胴部中位に最大径(26.1)	口縁部は横 ナデ 胴部はヘラ ナデ	口縁部は横ナデ、胴 部上半はヘラナデ胴 部中位から下位にか けて横位のヘリ削り	胎土はやや粗、焼成は良好、 色調は赤褐色を呈するが、 胴部外面は一部黒色を呈す る。PとPとの箱裏床面 より割れて出土。

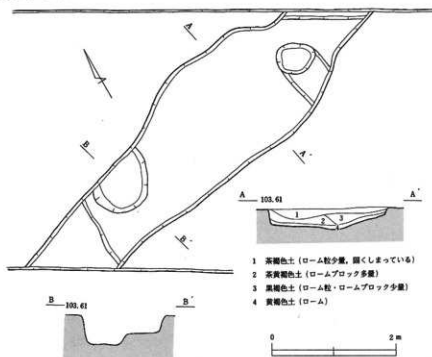
第16表 8号住居跡出土土器観察表(2)

種別	土 師 器						その他	合計
	罍			坏				
器種	罍			坏			石	
部 位	口縁部	口縁-体部	体部	体-底部	口縁-体部	体部	体-底部	
出 土 地 点	覆土上層	1			3			4
	覆土中層	3	6	58	1	8	5	1 82
	覆土下層	1		41		1	1	1 7 52
カマド 位置	カマド (覆土3層)	1	1	31				33
	カマド (覆土10層)		1	16				17
貯蔵穴 (覆土10層)	1							1
合 計	6	9	146	1	12	6	1 8	189

第17表 8号住居跡土器破片資料

1号溝 (SD 1)

この溝は、1号住居跡の東約6mの地点で検出されたもので、溝の方向は、北東および南西方向に延びるものと思われる。規模は、上端幅約110～194cm、下端幅98～180cmで深さは約18～45cmである。断面形は逆台形を呈し、東壁および北壁とも約75度の角度で立ち上がる。溝内堆積土は4層に分けられ、全体的に固くしまりのある土質である。遺物は、土師器の坏・甕の破片および須恵器の坏の破片等が出土している。



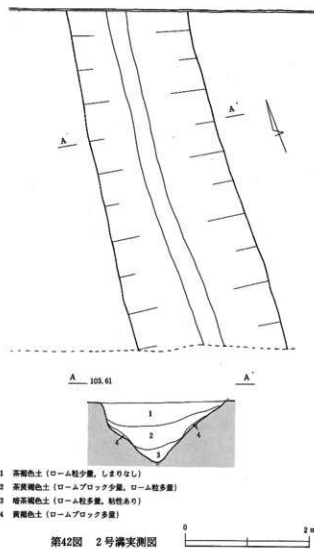
第41図 1号溝実測図

種別	土 師 器					須恵器	合計
	甕			坏			
器種							
部 位	口縁部	口縁～体部	体部	口縁～体部	体部	体部	
出土 地点 ・ 層位	覆土上層	1	5	49	4	2	61
	覆土中層	1		5	2	1	10
	覆土下層			3			3
合 計	2	5	57	6	3	1	74

第18表 1号溝土器破片資料

2号溝 (SD 2)

この溝は、6号住居跡の西約2mの地点で検出された。南側は仮設道路による攪乱の為、確認できなかったが、溝の方向は、南北方向に延びるものと思われる。規模は、上端幅約196~250cm、下端幅約28~34cmで深さは約90~96cmである。断面形は「V」字状を呈し、堆積土は3層に分けられる。遺物は、土師器の坏・甕の破片および須恵器の甕の破片等が出土している。この2号溝と他の遺構との重複関係は認められない。なお、検出された破片資料については第19表に示したとおりである。



種別	土 師 器					須 恵 器	其 他	合 計
	口縁部	口縁-体部	体部	体-底部	底部			
出土地点								
層位								
覆土上層	3		3			1		7
覆土中層			6		1		1	8
覆土下層								5
合 計	3		9		1	1	1	20

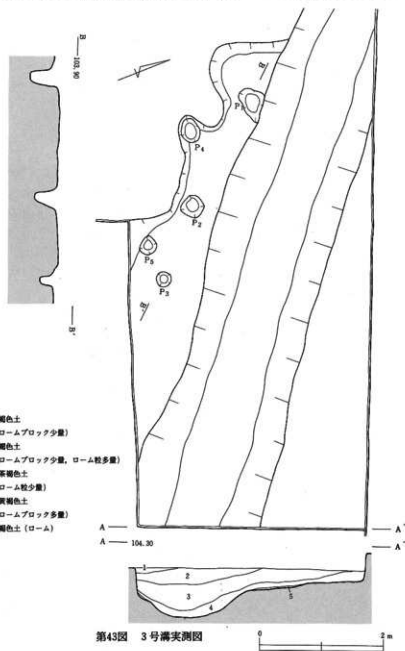
第19表 2号溝土器破片資料

3号溝 (SD 3)

この溝は、西側調査地区の北西端から検出されたもので、調査地区の中央部分が擾乱の為確認できなかったものの、形状や規模等から7号住居跡の南西から検出された溝に続くものと思われる。溝の方向は、北西および南東方向に延びるものと思われ、規模は、上端幅約90-210cm、下端幅約54-98cmで深さは約78-90cmである。断面形は「U」字状を呈し、北壁については比較的緩く立ち上

がる。溝内堆積土は大きく3層に分けられ、不規則ながら土師器や須恵器の破片等が出土している。また、溝の南側には、溝に沿うような形で5個のピットが検出されている。各ピットの深さは、それぞれP₁が44cm、P₂が34cm、P₃が22cm、P₄が40cm、P₅が25cmである。なお、この3号溝と他の遺構との重複関係は認められない。検出された破片資料については第20表に示したとおりである。

- 1 黒褐色土 (ロームプロッタ少量)
- 2 黒褐色土 (ロームプロッタ少量、ローム粒多量)
- 3 暗茶褐色土 (ローム粒少量)
- 4 赤茶褐色土 (ロームプロッタ多量)
- 5 黄褐色土 (ローム)



第43図 3号溝実測図

種別	土 師 器							須 恵 器	土師賈	土 師 石	その他	合計
	器 種	甕			坏							
部 位	口縁部	口縁-体部	体部	体-底部	口縁-体部	体部	体部	体部	体部			
出土 地点	覆土上層	1		34	1		3	5		2	2	48
層位	覆土中層		5	26				4	1	1 (内耳)		37
	覆土下層											3
合 計		1	5	60	1	3	9	1	3	5	88	

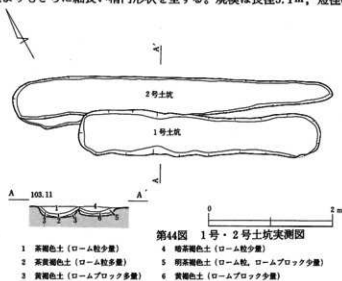
第20表 3号溝土器破片資料

1号土坑 (SK 1)

この土坑は、東側調査地区の東端から約6.5m西の地点で、2号土坑と切り合う形で検出された。切り合い関係は1号土坑が2号土坑の一部南壁を切っており、平面形は東西に細長い楕円形状を呈する。規模は長径3.8m、短径0.6mを測り、壁高は南壁で14cm、北壁で10cmである。断面形は皿形を呈し覆土は3層に分けられる。出土遺物は認められなかった。

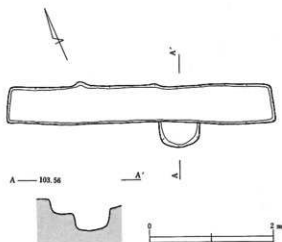
2号土坑 (SK 2)

この土坑は、前述したように1号土坑によって南壁の一部が壊される形で、1号土坑のすぐ北から検出されたもので、1号土坑よりもさらに細長い楕円形状を呈する。規模は長径5.1m、短径0.4mを測り、壁高は南壁で12cm、北壁で22cmである。断面形は1号土坑と同様、皿形を呈し覆土は3層に分けられる。出土遺物は覆土中より土師器の破片が1点出土したのみであるが、2号土坑の西南約10～30cmの地点より同様な罫手の土師器の破片が4点検出されている。



3号土坑 (SK 3)

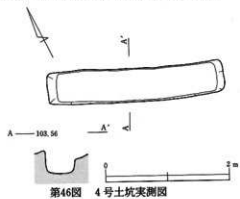
この土坑は、3号住居跡内の西寄りの位置で、住居跡内覆土上層上面で検出された。切り合い関係は、3号住居跡の西壁を切り、床面下まで掘り込まれていることから3号住居跡が埋設した後にこの土坑は掘られたものと思われる。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は長径4.3m、短径0.6mを測る。壁高は南壁で48cm、北壁で28cmであり、断面形は「U」字状を呈する。また、南壁のほぼ中央部には半円形状の掘り込みが認められる。覆土および出土遺物等については3号住居跡で報告したとおりである。



第45図 3号土坑実測図

4号土坑 (SK 4)

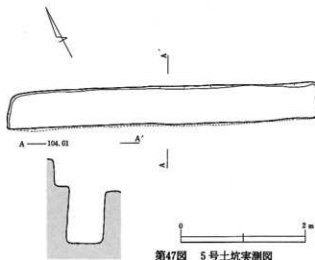
この土坑は、3号土坑の西約2mの地点で円形にまわる溝の一部を切る形で検出された。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は長径2.9m、短径0.5mを測り、壁高は南壁で34cm、北壁で20cmである。断面形は「U」字状を呈しており、出土遺物は認められなかった。



第46図 4号土坑実測図

5号土坑 (SK 5)

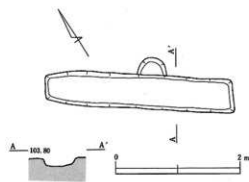
この土坑は、4号住居跡の南約1mの地点で検出され、平面形は、3号・4号土坑同様東西に長い長方形を呈する。規模は長径5.0m、短径0.6mを測り、壁高は南壁で92cm、北壁で90cmである。断面形は「U」字状を呈しており、出土遺物は認められなかった。覆土については4号住居跡で報告したとおりである。



第47図 5号土坑実測図

6号土坑 (SK 6)

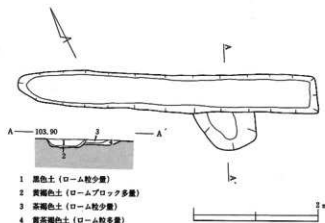
この土坑は西側調査地区の7号住居跡内北寄り位置で、住居跡内覆土上層上面で検出された。切り合い関係は、7号住居跡の東壁および柱穴の一部を切り、床面下まで掘り込まれていることから期的には7号住居跡よりも新しいということになる。平面形はほぼ東西に長い長方形を呈し、規模は長径3.2m、短径0.5mを測る。壁高は南壁で12cm、北壁で10cmであり断面形は、皿形を呈する。覆土は2層に分けられ、出土遺物は認められなかった。



第48図 6号土坑実測図

7号土坑 (SK 7)

この土坑は、7号住居跡の南約1mの地点で、住居跡の南西コーナーを一部切る形で検出された。平面形は、西端部がやや楕円形を呈するが全体にはほぼ東西に長い長方形を呈している。規模は長径4.8m、短径0.6mを測り、壁高は南壁で10cm、北壁で12cmである。断面形は皿形を呈し、覆土は2層に分けられる。

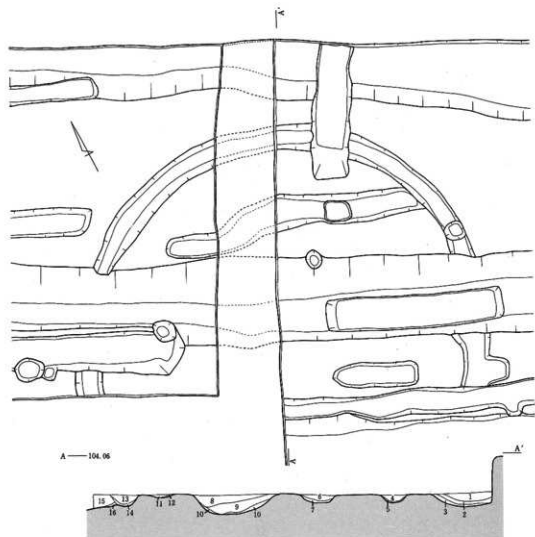


第49図 7号土坑実測図

また、南壁のやや東寄りに半円形状の浅い掘り込みが認められる。出土遺物は認められなかった。

1号性格不明遺構 (SX 1)

この遺構は、東側調査区3号住居跡と4号住居跡の中間にあたる位置から検出された。南側部分は仮設道路によって把握できないが、幅約40cm、深さ約16cmの溝が円形にめぐる形で確認された。前述したように、この地区は、土坑および後世の溝等による攪乱がひどく残存状態は良くないが、規模は東西の外径6.7m、内径5.8m程であると思われる。また、周溝の内外に径約30cmのピットが検出されているが、これらが本遺構に伴うものであるかどうかは不明である。なお、円形状にめぐる周溝内の覆土から遺物の出土は認められなかった。



- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| 1 赤褐色土 (ローム粒少量) | 9 赤褐色土 (ローム粒多量) |
| 2 暗赤褐色土 (ローム粒, ロームブロック多量) | 10 赤黄褐色土 (ロームブロック多量) |
| 3 黄褐色土 (ロームブロック多量) | 11 赤黄褐色土 (ロームブロック少量) |
| 4 赤褐色土 (ローム粒少量) | 12 赤褐色土 (ローム) |
| 5 黄褐色土 (ローム粒少量) | 13 赤黄褐色土 (ローム粒少量しもあり) |
| 6 暗赤褐色土 (ローム粒多量) | 14 黄褐色土 (ロームブロック多量) |
| 7 黄褐色土 (ロームブロック多量) | 15 茶褐色土 (ローム粒多量しもあり) |
| 8 暗赤褐色土 (ロームブロック少量) | 16 黄褐色土 (ローム粒多量) |

第50図 1号性格不明遺構実測図

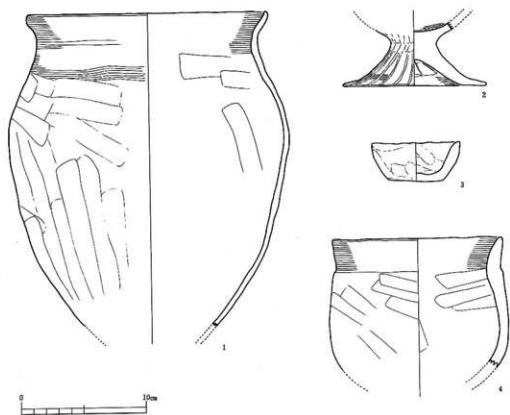
表土中よりの出土遺物

今回の発掘調査においては表土の除去にあたり、重機は使用せず(航空法による制限の為)手掘りにて作業を進めたことで、これに含まれていた遺物がかなり採取できたとともに比較的これら

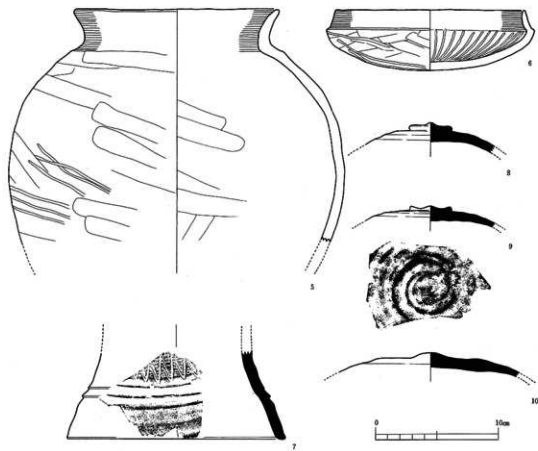
の出土位置等を明確に割り出すことができた。表土中の遺物の多くは小破片であるが、中には残存状態の良好な遺物も認められる。ここでは図示可能な10点(1~10)の遺物を報告し、破片資料についても集計表にて取り扱うこととする。

1は土師器の甕で、B-2区に設定した土層観察の為のベルト中から出土したものである。器厚は薄く、割れた状態で検出された。2は高杯の脚部で、A-7区の覆土中より、また、3は手づくね土器で、C-9区北側の覆土中より検出された。4と5は土師器の甕で、それぞれB-12区、B-4区南側の覆土中から出土し、特に5については半分が欠損しているが立てられた状態で検出された。付近から粘土塊および焼土が少量に検出されていることから、現在は道路により削平されて確認できないが何らかの遺構に伴う遺物であった可能性が高い。6は土師器の坏で、B-12区の遺構確認面から、7は須恵器の器台の破片と思われ、B-13区の遺構確認面から、また、8、9、10は、いずれも須恵器の蓋で、B-13区の遺構確認面から検出された。

なお、各出土土器の特徴については第21、22表に、また、表土中の破片資料については破片資料集計表(第23表)に示したとおりである。



第51図 表土中よりの出土遺物実測図1)



第52図 表土中よりの出土遺物実測図2)

序号 (保存番号)	数量	器形の特徴	調査の特徴		胎土・焼土・色調・その他
			内面	外面	
1 土師器 (34)	19.6 — —	全体に厚く均一な胎土、口縁部は近辺部に立ち筋部はつまみ上げられる。最大径は胴部土位にあり(22.4)胴部下半は胎土にすぎない。	口縁部は横ナゲ 胴部はヘラナゲ	口縁部は横ナゲ 胴部はへう削り	胎土は密、焼成は良好、色調は褐色を呈する。 B-1区層土中より出土。
2 土師器 高杯 (34)	残存高 5.1cm	胴部のみ残存、胎土は厚く下方に磨き胴部にかけてなだらかに磨ける。	口縁部はへう削り 胴部は横ナゲ	胴部は横ナゲ、杯部と胴部のつなぎ部分にはヘラナゲ、他は胴部のへう削り	胎土は密、焼成は良好、色調は外面が褐色を呈し内面は黒褐色を呈する。 A-7区層土中より出土。

第21表 表土中よりの出土遺物観察表(1)

分類 種別 (種名)	法量	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
			内面	外面	
1 土 胎 部 平(は)土調 (5)	(7.2) 3.1 4.4	平底で口縁部は外傾する。	口縁部から底部にかけて胎ナデ	口縁部から底部にかけて胎ナデ	胎土はやや粗、焼成は良好、色調は内外面とも褐色を呈する。C-1区は北側の置土中より出土。
2 土 胎 部 調 (5)	(13.8) (13.2) —	口縁部と胴部の間に明確な段を有し、口縁部は広く外反する。胴部の胴輪を呈し小形	口縁部は横ナデ 胴部はへう割り	口縁部は横ナデ 胴部はへう割り	胎土はやや粗、色調は褐色を呈すが一部外周は黒色を呈する。B-1区置土中より出土。
3 土 胎 部 調 (5)	(14.5) — —	口縁部と胴部の間に段・段を有し、口縁部は広く外反する。	口縁部は横ナデ 胴部はへう割り	口縁部は横ナデ 胴部はへう割り後若干へう割り	胎土はやや粗、焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。B-4区南側置土中から出土された状態で出土。
4 土 胎 部 平 (5)	(15.3) (4.9) —	体部外面に段を有し、口縁部は内傾する。	口縁部は横ナデ 体部は放射状のへう割り	口縁部は横ナデ 体部はへう割り後若干へう割り	胎土は粗、焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。B-1区遺構層面より出土。
5 須 磨 部 白 硬 片	— — (11.6)	器台の台板片と思われる、外面には明確に土糸の痕跡がみられる。	ロクロ成形	ロクロ成形、器縁の上方にはハツリ現象が明瞭に観察され、胎土が凝り固まっている。	胎土は細粒、焼成は良好、色調は内外面とも灰白色を呈する。B-1区遺構層面より出土。
6 須 磨 部 調 (5)	— つまみ部 3.4	天井部はやや扁平で広い、中央部に扁平な鑿文形状つまみを有す。	ロクロナデ	ロクロ成形 天井部は凹輪へう割り、つまみはハラツケ	胎土は細粒、焼成は良好、色調は内外面とも灰白色を呈する。B-1区遺構層面より出土。
7 須 磨 部 調 (5)	— つまみ部 (3.4)	天井部はやや丸縁があり、中央部に扁平な鑿文形状つまみを有す。	ロクロ成形	ロクロ成形 天井部は凹輪へう割り、つまみはハラツケ	胎土はやや粗、器形を含有、焼成は良好、灰褐色を呈する。B-1区遺構層面より出土。
8 須 磨 部 調 (5)	— つまみ部 (3.6)	天井部はやや扁平で、中央部に扁平な鑿文形状つまみを有す。	ロクロ成形	ロクロ成形 天井部は凹輪へう割り	胎土はやや粗、焼成は良好、内外面とも褐色を呈する。B-1区遺構層面より出土。

第22表 表土中よりの出土遺物観察表(2)

種別	土 師 部				土 師 部				高 環				環				環				土師部 その他 合計		
	部位	環		環	環		環	環	環		環	環		環	環		環	環					
		環	環		環	環			環	環		環	環		環	環			環	環			
A-1 土師部		1	34	2		3														43			
B-1 土師部		5	21	42	3	5	1	1	1		1				2	3	1	1	1	107			
B-2 土師部		1	31	3		3	3	1		2										3			
B-3 土師部		3	31	1		3														37			
B-4 土師部			6			3														7			
B-5 土師部		1	7	16	1		4	3												28			
B-6 土師部		2	4	16			3							1			1			27			
B-7 土師部		2	13	43	3	3	8	11	1					1	1	1	1	1	1	84			
B-8 土師部		2	3	46			4	3	1											4			
B-7 土師部		3	4	28	1	1	4	3	1				1							47			
B-7 土師部		1	20	1			3	1												26			
B-6 土師部		8	8	103		1	13	4	1	1					1		1	1	1	140			
B-8 土師部			15			1	1	1											2	20			
B-8 土師部		10	9	131	5	2	13	11	1	1		2	1	1	3	2				189			
B-9 土師部		1	19				3						1							24			
B-10 土師部		2	9	35	1		4	6	1											78			
B-10 土師部		1	3	26			4	1												34			
B-11 土師部		2	4	26	3	1	1	2	2					1						32			
B-11 土師部		3	5	35	3	2	3	4	1			1								60			
B-12 土師部		1	3	43			9	3	3					1						63			
B-12 土師部		1	4	26	2		1	4	2					1						41			
B-13 土師部		4	6	102	3		10	7	2	2		1	1	1	1	2				132			
B-13 土師部		6	13	147		1	26	4	2	3		1	3	1	4	1	4		4	221			
B-14 土師部		1	2	94	1	4	11	5				1	5	1	1	1			2	129			
B-14 土師部		5	12				5	4	1			2	7	3	1	2	2			66			
B-15 土師部		6	3	5	2	2	4	2	2			4	1							32			
B-9 土師部			10	19	1		1	4			1				1					86			
C-10 土師部		1	1	1			2													5			
C-11 土師部			2						1											3			
C-11 土師部									2											2			
C-12 土師部			2				2						1							5			
C-12 土師部			9																	9			
C-13 土師部		3	6	37	2		4	6												53			
C-13 土師部		2	33		1		2	2	2			2								46			
C-14 土師部		2	3	20	3		4	2	1	1				1						36			
総合計		64	143	1,382	53	22	1,171	89	20	16	3	3	5	28	3	2	12	14	12	6	3	29	1,980

第23表 表土中よりの出土遺物破片資料集計表

V ま と め

以上が今回の調査で検出された遺構および出土遺物の様相である。最後に、本遺跡における遺構・遺物について特徴的である点を示してまとめたい。

1 遺構について

本調査で確認された住居跡は8軒である。このうち住居跡の平面形については、ほぼ正方形を呈するもの、やや長方形を呈するものの二つに大別でき、前者については、1号、3号、4号、6号、8号住居跡、後者については、2号、5号、7号住居跡がそれぞれ挙げられる。また、住居跡の規模については、一辺が3.6m程の小さなものから、7.2m程の大きなものまで様々であり、規則性は認められない。カマドについては、未使用のものも含めてほぼすべての住居跡に、その存在痕跡が認められたが、8軒の住居跡中比較的良くカマドが遺存していたのは5軒である。カマドの位置は、壁の中央に構築されているものが主であるが(1号、3号、5号、6号(2)、8号住居跡)、中央から少しずれて設けられているもの(2号、4号、6号(1)、7号住居跡)も認められる。カマドの構築材および方法に関しては、褐色粘土を使用して構築したものがほとんどであるが(1号、2号、3号、4号、5号、7号住居跡)、6号住居跡のように、凝灰岩切石を組んで構築したものや、8号住居跡のように、土師器の甕を連結して構築したものも見受けられる。特に、6号住居跡からは、一つの凝灰岩切石を三分してカマドに用いたと思われる例も認められ、注目される。カマドの方向は、北方向が、2号、3号、6号(2)住居跡、北東方向が、1号、7号、8号住居跡、東方向が、4号(2)、5号、6号(1)住居跡、西方向が、4号(1)住居跡である。柱穴については、4本柱の住居跡がほとんどであるが(5号、6号、7号、8号住居跡)、2号、4号住居跡のように、Pitは検出されるが柱穴として組まない住居跡も認められる。カマド・柱穴以外の付属施設としては、特に厨溝に関して、「内側へ直角に延びる溝」いわゆる「間仕切溝」と呼ばれる溝が5号住居跡から3本、6号住居跡から1本検出されている。8軒の住居跡のうち、切り合い関係にあるものは、1号・2号住居跡、7号・8号住居跡である。前述したように、1号住居跡が2号住居跡を、また、7号住居跡が8号住居跡を切る形で検出された。

溝跡・土坑に関しては、それぞれ、3条、7基検出された。このうち、住居跡と切り合い関係にある3号、6号、7号土坑については、住居跡よりも新しい時期であることが明らかであるが、この他については、出土遺物が明確にこれらの遺構に伴うとは考えられず、年代を決定するには至っていない。

性格不明遺構に関しては、幅約40cm、深さ約16cm程の溝が、直径約6～7mの規模で円形にめぐるといふ形状より、いわゆる「円形厨溝遺構」の範疇に入れてさしつかえないものと思われる。これ

によって同種の検出例は、9例となるが(第24表のとおり)、いずれも遺構の機能等を究明する資料に乏しく、本報告においても「群在せず単独で存在する」という共通点を示すだけに留めざるを得ない。

遺跡名・遺跡番号	規 模 (長径×短径m)	周溝 (深さcm)	備 考	献 文 番 号
1 在野市工業団地内遺跡・33号	18×17.5	50-100	切り合い関係等は認められない。	①
2 *	15×14	50-	23号、39号住居跡と切り合う。	①
3 龍山A遺跡	5.2×5.0	15-25	4号井戸と切り合う。周溝内に深さ20-50cmのピットが4個	②
4 龍山遺跡・1-A号	5.0×4.2	30-35	周溝内より土師器の埴形土器一胴体が出土	③
5 *	6.8×6.0	10-25	周溝の外側にピットが並ぶ	③
6 *	6.6×5.6	30-	周溝の外周5-40cmの範囲内にピットが検出されている。	③
7 龍山公園遺跡	6.5×6.05	15-32	周溝は一部分とぎれて全周はしない。	④
8 仮称第59小学校建設予定地内遺跡	5.75×5.0	16-35	12号住居跡に北東部分の周溝が切られている。	⑤
9 岡道遺跡・S×1	6.7×6.4	16-20	土坑および後世の溝等による擾乱を受けている。	本報告

第24表 栃木県における円形周溝遺構を有する遺跡例

2 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、土器、鉄器であるが、多数出土した遺物は土師器であり、甕、瓶、高坏、鉢、碗、杯および手づくねの7種が認められる。このうち比較的出土量が多く、残存状態の良好な埴形土器(16点)、埴形土器(17点)について少し考えてみたい。

埴形土器に関しては、器形の変化に基づいておおむね次の4つに分類が可能である。

- ・A類 球形の胴部を呈し、最大径は胴部中位に有す。また、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、やや外反しながら口唇部に至る。
- ・B類 球形の胴部を呈し、最大径は胴部中位に有す。また、口縁部はゆるやかに外反する。
- ・C類 胴部はやや膨らみ、長胴化傾向を示す。最大径は口縁部に有し、口縁部はゆるやかに外反する。
- ・D類 胴部はわずかに膨らみ、著しい長胴を示す。最大径は口縁部に有し、口縁部と胴部の境に軽い稜をもつ。

また、調整手法により次の4つに分類することができる。

- ・I類 口縁部内外面は横ナデ、胴部外面にはヘラ磨き調整を施す。
- ・II類 口縁部内外面は横ナデ、胴部外面にはハケ目調整を施す。
- ・III類 口縁部内外面は横ナデ、胴部外面にはヘラナデ調整を施す。

- ・Ⅳ類 口縁部内外面は横ナデ、胴部外面には縦位のヘラ削り調整を施す。
一方、杯形土器に関しては、次の7つに分類が可能である。
 - ・A類 半球形状を呈し、体部外面に軽い稜を有して口縁部はやや内傾する。
 - ・B類 半球形状を呈し、体部外面に明瞭な稜を有して口縁部は内傾する。
 - ・C類 体部外面に軽い稜を有し、口縁部は外上方に開く。
 - ・D類 やや扁平な半球形状を呈し、口縁部は短く直立、または内傾する。
 - ・E類 全体的に扁平な半球形状を呈し、体部外面に軽い稜を有して口縁部は直立するか、やや内傾する。底部の器厚が薄くなる。
 - ・F類 器高に比して口径が大きくなり、底部は極めて平底に近い丸底を呈する。口縁部は体部外面に軽い稜をもって外傾するか、稜をもたずにそのまま外傾する。
 - ・G類 器厚は全体的に薄手で、半球形状を呈して口縁部はわずかに直立する。
- また、調整手法によって次の4つに分類できる。
- ・Ⅰ類 口縁部内外面は横ナデ、体部外面にはヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。
 - ・Ⅱ類 口縁部内外面は横ナデ、体部外面にはヘラ削り、内面にはヘラ磨き調整が施される。
 - ・Ⅲ類 口縁部内外面は横ナデ、体部外面にはヘラ削り、内面には全体に横ナデ調整が施される。
 - ・Ⅳ類 口縁部内面あるいは外面はヘラ磨き、体部内面にはヘラ磨き調整が施される。

それでは、前述した分類に従って住居跡出土遺物について検討し、切り合い関係を踏まえた上でそれぞれの時間的位置を検証したい。

3号住居跡

変形土器B-Ⅲ類(1, 8)の出土が認められ、これに小形短胴の変形土器および単口で大形と小形の甔形土器が伴出する。また、杯形土器については良好な資料とは言い難いが、口縁部から体部にかけての小破片がカマドの覆土中から検出されている。図示し得なかったが、一点は体部外面に稜を有して口縁部は外反気味に直立するもので、もう一点は口縁部が短く内傾し口唇部が尖るものである。

5号住居跡

変形土器A-Ⅰ類(3)、A-Ⅲ類(6, 8)、B-Ⅰ類(4)、B-Ⅱ類(5, 7)の出土が認められ、これにA-Ⅰ類(1)の杯形土器とともに、大形で単口の、胴部にやや丸みをもつ甔形土器(18)、小形で単口の甔形土器、また、小形の変形土器と埴形土器が伴出する。本土器群と類似する出土状況を示すものとしては、権現山北遺跡⁷7号、16号住居跡が挙げられ、変形土器については、本類型のA-Ⅲ類が該16号住居跡の4に、B-Ⅱ類が該7号住居跡の4、13に、また、杯形土器については、該16号住居跡の14に類似性が認められる。なお、本住居跡出土の甔形土器(18)と、該7号住居跡の18にも類似性が認められる。

6号住居跡

甕形土器C-II類(11)、C-III類(10)、および坏形土器B-I類(6)、B-II類(3、5)、C-II類(1)、D-II類(2、4、7)、D-III類(9)の出土が認められ、これに大形で単口の、胴部外面にヘラ磨き、またはハケ目調整の施された甕形土器が伴出する。この甕形土器C-III類に類似するものは、瑞穂野団地遺跡北地区⁷7号住居跡の3や佐野市上敷遺跡B地区⁸2号住居跡の1、3等が挙げられ、坏形土器については、権現山北遺跡⁹4号住居跡において、本類型のB-I類が該4号住居跡の36、49に、以下同様に、B-II類が40、45、48、D-II類が15、18、30、D-III類が19にそれぞれ類似する。しかし、坏形土器に関して言えば、本遺跡のものの方が全体に器高が浅く、やや扁平化が進むとともに、体部内面のヘラ磨き調整がやや粗くなると言うことができる。

7号住居跡

甕形土器については、床面および覆土下層からの出土が認められず、特に、坏形土器について、F-III類(1、3)、G-II類(2、4)の出土が認められる。この種の坏形土器を出土する遺跡としては、猿山遺跡¹⁰1-21号住居跡の86、同2-4号住居跡の126、また、南河内町薬師寺南遺跡¹¹12号住居跡の3、同24号住居跡の28、31、37、同27号住居跡の24、同60号住居跡の2、同72号住居跡の5、同111号住居跡の5等が挙げられる。

8号住居跡

甕形土器については、D-IV類(6、8、9)、B-I類(10)の出土が、また、坏形土器については、E-III類(1、3)、F-IV類(2)の出土が認められ、これに小形の甕形土器が伴出する。本土器群と類似する出土状況を示す遺跡として、甕形土器については、佐野市上敷遺跡B区7-A住居跡の1、2、4、猿山遺跡¹²1-18号住居跡の72、同2-5号住居跡の133、同3-10住居跡の240等が挙げられ、また、坏形土器に関しては、瑞穂野団地遺跡北地区18号住居跡の2、猿山遺跡¹³1-18号住居跡の69、70、同2-17号住居跡の174、175、同3-10住居跡の237等が挙げられる。

なお、1号、2号、4号住居跡に関しては、土器の出土量が多量に少なく、床面あるいは、覆土下層からの良好な出土遺物も認められなかったことから、これらの住居跡の時間的位置を導き出すのは非常に困難であり、ただ1号、2号住居跡の切り合い関係による、その前後関係を認めるのみに留まる。すなわち、2号住居跡(旧)→1号住居跡(新)である。

以上のようなことから、前述した土器群を有する住居跡の本遺跡における時間的変遷は、おおむね次のようになると思われる。



また、これらの時間的位置については、特に、5号住居跡と7号住居跡において押さえ示すことができるものと思われる。すなわち、5号住居跡と類似する土器群を出土した権現山北遺跡¹⁴16号住居跡において、褐色編年I期後半に比定される須恵器高坏形土器が伴出していることから、広く5

世紀末～6世紀前半という位置が与えられ、また、7号住居跡においても、南河内町薬師寺南遺跡^⑧における埴形土器第Ⅰ群および第Ⅱ群に類似する土器が出土していることから、8世紀前半という位置づけが可能である。なお、5号住居跡の土器群に関して言えば、全体に古い様相を呈しており先に述べた期間でも早い段階に位置づけることも可能であると思われる。

以上が、主な調査成果である。調査範囲が道路敷地内という限定された部分のみであったが、調査によって得られた様々な情報により、さらに東西あるいは南北に延びるであろう本遺跡の一端を窺い知ることができた。本遺跡の全容を解明するには、さらなる情報の集積が不可欠であり、今後の本遺跡周辺の資料増加に期待したい。

また、今回の調査にあたっては、小破片遺物の資料化にも努めた。これには一定の限界があり、今回は十分活用、検討し得なかったが、これらの破片資料をより有意義に分析することによって、遺跡に対する側面からのアプローチも可能であると思われる。

- 註① 栃木県教育委員会 『佐野市工業住宅団地内遺跡』 昭和45年
註② 栃木県教育委員会 『猿山A遺跡』 昭和53年
註③ 川原由典・中山晋 『猿山遺跡』 栃木県教育委員会 昭和56年
註④ 宇都宮市教育委員会 『聖山公園遺跡』 I～IV 昭和58～61年
註⑤ 仮称第59小学校建設予定地内遺跡に関しては、現在（昭和63年度）も調査継続中であり、筆者が昭和62年度に円形周溝遺構の調査を担当した。
註⑥ 宇都宮市教育委員会 『権現山北遺跡』 昭和54年
註⑦ 宇都宮市教育委員会 『瑞穂野田地遺跡』 昭和53年
註⑧ 栃木県教育委員会 『佐野市上敷遺跡』 昭和52年
註⑨ 註⑥に同じ
註⑩ 註③に同じ
註⑪ 栃木県教育委員会 『薬師寺南遺跡』 昭和54年
註⑫ 註⑩に同じ
註⑬ 註⑩に同じ
註⑭ 註⑦に同じ
註⑮ 註③に同じ
註⑯ 註⑥に同じ
註⑰ 田辺昭三 『陶器古窯址群Ⅰ』 平安学考古学クラブ 昭和42年
田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 昭和56年
註⑱ 橋本浩明・梁木誠 『歴史時代土器の編年』 『薬師寺南遺跡』 栃木県教育委員会 昭和54年

図 版

PL. 1



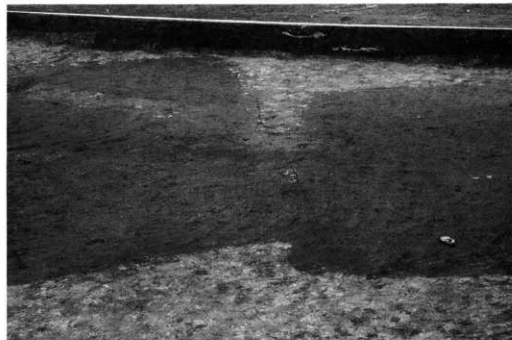
① 調査前の風景（西から）



② 表土除去作業風景（東から）



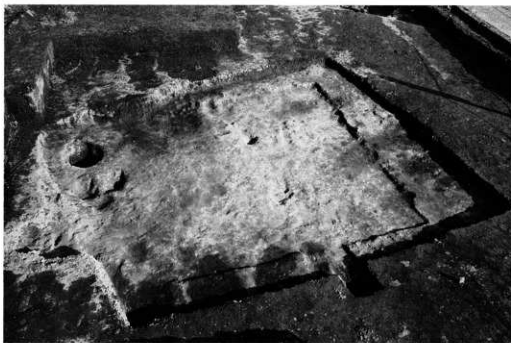
① 遺構検出状況（東北区）



② 遺構検出状況（7号, 8号住居跡）



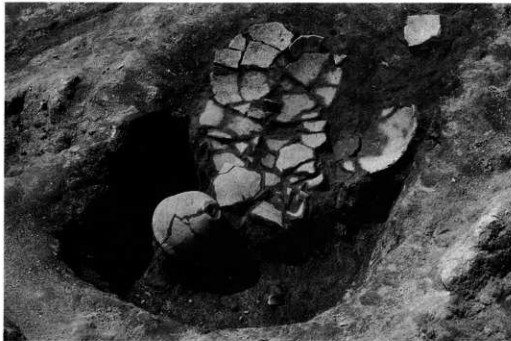
① 1号住居跡（西から）



② 1号, 2号住居跡（西から）



① 3号住居跡遺物出土状況（北から）



② 3号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南から）



① 3号住居跡と擾乱状況（東から）



② 4号住居跡（南東から）



① 5号住居跡遺物出土状況(西から)



② 5号住居跡カマド(西から)

PL 7



① 5号住居跡（西から）



② 6号住居跡遺物出土状況（北西から）



① 6号住居跡カマド (南西から)



② 6号住居跡 (西から)

PL 9



① 7号住居跡 (西から)



② 7号, 8号住居跡 (西から)



① 8号住居跡カマド(南から)



② 8号住居跡(南から)

PL 11



① 遺構全景 東地区（西から）



② 遺構全景 西地区（西から）



① 遺跡の調査状況



② 遺跡の現況



③ 発掘調査関係者



16-1



16-3



16-4



16-2



16-2



16-4

3号住居跡出土土器 (1)

PL. 14



17-5



17-7



17-6



17-8

3号住居跡出土土器 (2)



24-1



24-2

5号住居跡出土土器 (1)



5号住居跡出土土器 (2)



25-7



26-11



26-8



26-11



26-12



26-9



26-10

5号住居跡出土土器 (4)



30-1



30-2



30-3



30-4

6号住居跡出土土器 (1)

PL. 18



30-5



30-6



30-7



30-8



30-9



30-10



31-11

6号住居跡出土土器(2)



31-15



32-16



31-15



32-16



31-13



32-18

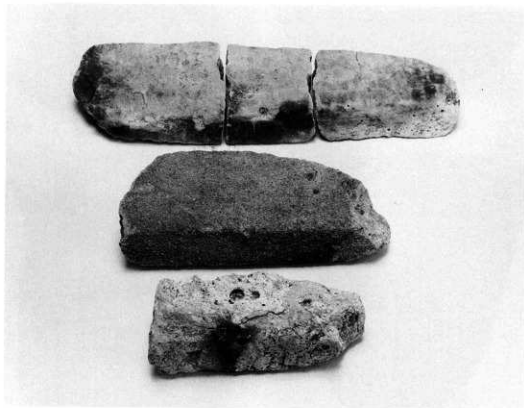
PL. 20



32-17



32-19, 20, 21



6号住居跡出土遺物(4)



35-1



35-3



35-2



35-8



35-4



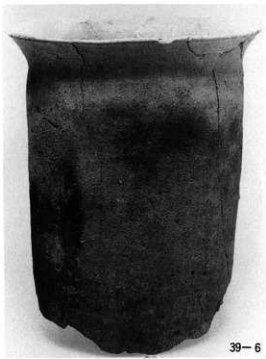
35-8



35-5



35-6



8号住居跡出土土器(1)



8号住居跡出土土器(2)



51-1



51-2



51-3



51-4



52-5



52-6



52-7



3号住居跡出土の主な土器



5号住居跡出土の主な土器



6号住居跡出土の主な遺物



8号住居跡出土の主な土器



関道遺跡出土の主な遺物

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第25集

開道遺跡

昭和63年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課
(宇都宮市旭1丁目1番5号)

T E L (0286)32-2747

印刷 朝松井ビ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-2)

T E L (0286)62-2511
